

21世紀のための友情計画
アフターケア調査チーム報告書
(1989年度)

平成2年9月

国際協力事業団

RY

21世紀のための友情計画
アフターケア—調査チーム報告書
(1989年度)

JICA LIBRARY



1091367(1)

225.14

平成2年9月

国際協力事業団

国際協力事業団

22514

はじめに

この報告書は、ASEAN青年の本邦招へいをもって出発した青年招へい事業を、日本・ASEAN双方向の交流に発展させ、永続的な友情を樹立することを目的として、昭和63年度より開始されたアフターケアーに係る平成元年度派遣チームの報告をとりまとめたものである。

本報告書が関係各位の本事業に対するご理解を一層深め、今後の調査チームに参加される方々の参考になれば幸いである。

平成2年9月

研修事業部長

ブルネイ



シナウト農業センター施設見学

お別れパーティー



インドネシア



IKIP民族音楽研究グループの練習見学

青年スポーツ省大臣表敬訪問

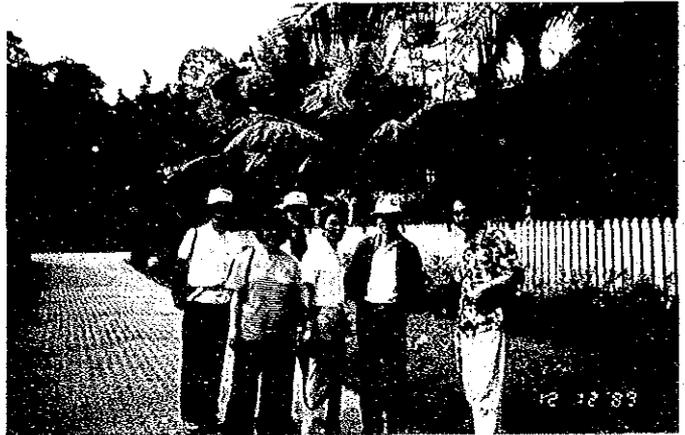


マレーシア



日本大使館訪問

ミニ・マレーシア公園視察



フィリピン



外務省表敬訪問

フィリピン大学訪問



シンガポール



同窓会メンバーと再会を祝して

大蔵省社会開発局訪問



タイ



ホームステイ

農業研修センターにて意見交換



目 次

はじめに

I. 概要報告	1
II 国別報告	
1. ブルネイ	5
2. インドネシア	35
3. マレーシア	57
4. フィリピン	87
5. シンガポール	97
6. タイ	121
III 付属資料	
1. 青年招へい事業アフターケア（日本青年派遣）実施要領	137
1-1 標準スケジュール	140
1-2 参加候補者推薦要領	141
1-3 推薦書様式	143
2. 青年招へい事業アフターケア業務実施契約書	146
3. アフターケア調査チーム報告書内容項目	158
4. 青年招へい事業アフターケア調査チーム派遣に係る会議日程等	159
5. アフターケア実施分担表	161

I 概 要 報 告

1. 目 的

青年招へい事業で我国での交流に参加した日本青年等をASEAN諸国に派遣し、ASEAN青年の本邦招へいをもって開始された本事業を双方向の交流に発展させ、専門分野別に本事業参加経験者の日本理解及び研修成果を更に深めるとともに、再交流を促進することによって、来日時に形成された友情を発展させ、永続的な友情関係を樹立することを目的とする。

2. 派遣対象者

都内分野別プログラム関係者、地方分野別プログラム関係者、共通プログラム関係者等「21世紀のための友情計画」日本側交流関係者

3. 派遣国、チーム編成等

ASEAN6ヶ国に対し、各々1チーム(5~6名)、合計6チーム(32名)を派遣。
チームの編成は、チームリーダー1名と団員による。

4. アフターケア事業に係る各国の評価及び要望事項

各国とも日本青年の派遣を相互交流に発展するものとして高く評価している。

なお、日本側への主な要望事項は次のとおりである。

- (1) 継続的派遣
- (2) 人数枠の拡大(30名程度)
- (3) 各国同窓会のカウンターパートとしての日本側同窓会の設立
- (4) 相互交流促進の中核となる各国同窓会活動への支援強化

5. 派遣日程等

派遣国	実施協力団体	派遣期間	参加者					
			実施協力団体	地方受入団体	共通プログラム	合宿セミナー	ホストファミリー	地方公共団体
ブルネイ	日本ユネスコ協会連盟	89年12月9日~12月19日	1名		1名	1名	2名	
インドネシア	中央青少年団体連絡協	89年12月6日~12月15日	1名	1名	1名	1名	1名	1名
マレーシア	青少年育成国民会議	89年12月5日~12月14日	1名	2名	1名		1名	1名
フィリピン	日本経済青年協議会	90年3月1日~3月10日	1名		1名	1名	1名	1名
シンガポール	日本国際生活体験協会	89年12月3日~12月12日	1名		1名	2名	1名	
タイ	青年海外協力協会	89年11月30日~12月9日		2名		1名	1名	1名
合 計			5名	5名	5名	6名	7名	4名

〈註〉共通プログラム関係者：武道関係者 2名、国際協力サービスセンター2名、体験的日本語学習 1名

地方公共団体：岩手県総務部国際交流室、福島県生活福祉部青少年婦人課

高知県国民休暇局計画推進課、熊本県総務部国際課 各1名

Ⅱ 国 別 報 告

ブルネイ・ダルサラーム

平成元年12月 9日～19日

(社) 日本ユネスコ協会連盟

1. 調査チームの派遣概要

1-1 調査チームの構成

アフターケアチーム参加者名簿

	氏 名	生 年 月 日	性	現 住 所 / 所 属 先
チーム・リーダー	上 田 啓 子	1958年 4月 2日	女	東京都杉並区久我山2-5-18 (社)日本ユネスコ協会連盟組織部
メ ン バ ー	志 賀 聖 一	1955年 1月 6日	男	群馬県桐生市天神町1-5-1 群馬大学工学部助教授
メ ン バ ー	木 村 優	1939年12月21日	男	群馬県太田市新島町308 太田市立城東中学校教員
メ ン バ ー	渡 辺 恵 子	1939年 4月11日	女	群馬県前橋市昭和町3-34-6 科学技術翻訳業(フリー)
メ ン バ ー	菊 池 周 平	1953年 8月 7日	男	千葉市長作町412-6 (財)国際協力サービスセンター

1-2 調査日程

1-3 主要面談者

アフターケア調査ブルネイチーム日程および主な面談者

月日 / 時刻	日 程	主 な 面 談 者
12月		
9日 15:30	ブリーフィング(上野ホテル泊)	
10日 7:00	ホテル出発	
10:45	成田発(SQ87)→ シンガポール着(19:00)	
20:45	ホテルチェックイン後、シンガ ポール青年と交流	
11日 7:00	ホテル出発	
9:15	シンガポール発(SQ182)→ ブルネイ着(11:15)	
12:15	ナショナルイン着	*Secretary General Alumni Society 21st Century
12:30	同窓会事務局長Mr. TAIBによ るブリーフィング	MR. HJ. MOHD. TAIB BIN HJ. OSMAN
14:30	教育省(Ministry of Educa- tion)表敬訪問 約1時間意見 交換 同窓生宅訪問	*Acting Director of Schools Ministry of Education MS. DATIN HJH NORSHAH BTE HJ DAUD
19:30	同窓会招待・歓迎夕食会 於: Mr. TAIB家	
23:00	ホテル着	
12日 9:00	ホテル出発	*Head of Handicraft Training Center MR. HJ. MUSTAFA AHMAD
9:30	ハンディクラフト・トレーニ ングセンター訪問	*Permanent Secretary Ministry of Culture Youth and Sports
11:00	文化青年スポーツ省表敬訪問 (Ministry of Culture Youth and Sports)	MR. DATO PEDUKA AWB. HJ. CHUCHU BIN D.P.A. HJ ABDULLAH
12:00	昼 食	*Deputy Director Welfare Youth & Sports Dept.
14:10	福祉青年スポーツ局 (Welfare, Youth and Sports Dept.)表敬訪問	MR. ABDUL RAHMAN HAJI MOHIDDIN
15:10	同窓生と1時間にわたり意見交 換会(副会長、事務局長、他 13人が出席)	*同窓会副会長 Secretary General Brunei Solidarity National Party MR. MOHD. HATTA B. HJ. ZAINAL ABIDIN

月日 / 時刻	日 程	主 な 面 談 者
12月		
12日 19:30 22:45	福祉青年スポーツ局招待夕食会 ホテル着	
13日 8:30 9:00 9:20 11:00 11:40 12:00 14:15 14:40 16:30 19:30 22:15	ホテル出発 ブルネイ大学訪問 教育省スタッフによるブルネイの教育制度の説明および、大学職員による大学概要説明 同窓生との意見交換 ヒストリーセンター見学 ヒストリーセンター Director と約30分間面談 昼 食 ホテル出発 ブルネイ工科専門学校 (Institute Technology Burunei) 訪問 約1時間の概要説明の後、学内を見学 ホテル着 日本大使館招待の夕食会 ホテル着	*Curriculum Development Dept. Ministry of Education MR. MOHD NOOR HJ SALLEL. *Bursar University Burnei Darussalam MR. JANIN ERIH *Head of Historical Centre DR. HAJI AWANG MOHAMMAD JAMIL AL-SUFRI *Deputy Director Institute Technology Burunei MR. HAJI ABU HANIFAH BIN HASI MOHO SALLEH
14日 8:30 9:00 12:30 14:00 15:10 16:30 17:00	ホテル出発 シナウト農業研修センター (Sinaut Agriculture Center) 訪問 約1時間の概要説明の後、センター内を見学 センタースタッフ等と昼食 マックファーム訪問 約1時間、概要説明と見学 技術研修センター (Technical Training Center) 訪問 約1時間、概要説明と見学 ホテル着 ホームステイ受け入れ家庭へ移動	*Lecturer Sinaut Agricultural Training Center MR. AWANG BASUNI ASHAARI ZAINAB HJ. MOHD. ZAIN. MR. RAMON F. SANTIAGO (フィリピン人) *Project Manager MCFarm Sendirian Berhad (日本人スタッフ) MR. HIROSHI SAWADA MR. KASTUTO IIJIMA *Acting Principal Mechanical Training Centre MR. MOHD HUSAIN BIN HJ AWG BESAR

月日 / 時刻	日 程	主 な 面 談 者
		*Expert on Construction Machinery (日本人スタッフ) MR. SUEO KOBAYASHI MR. JUNJI IKENAGA ME. ISAMU HATAMURA
15日 20:00	ホームステイ ホテル集合	
16日 9:00 9:45 12:20 14:15 15:15	ホテル出発 林業研究プロジェクト(Sungai Liang Forestry Dept. Center) 訪問 約2時間、概要説明と見学 昼 食 林業プロジェクト主任 古越氏宅訪問 ホテル着 後自由	*Leader of Forestry Research Project in Brunei (日本人スタッフ) MR. TAKANOBU FURUKOSHI *Expert of Forest Management (日本人スタッフ) MR. KYOJI HASHIMOTO
17日 8:00 15:30 19:45 22:30	ホテル出発 参加青年の親戚の結婚式に出席 ホテル着 本調査チーム、ブルネイ側同窓会主催の歓送会 ホテル着	
18日 9:30 9:45 12:15 15:15 15:45 18:40 21:00	ホテル出発 日本大使館表敬訪問 ブルネイ発(SQ181)→シンガポール着(14:10) ホテル着 シンガポール参加青年の案内で市内見学 参加青年と食事 ホテル着	*Minister-Caunsellor MR. TAKAICHI YONEDA 米田公使 *日本大使館 一等書記官 小原 修
19日 6:30 9:00 17:45	ホテル出発 シンガポール発(AQ12)→成田着(16:15) 解 散	

2. 調査の概要

当チーム受け入れ担当者タイプ氏の尽力とブルネイ同窓会の協力で、僅かな準備期間しか無かったにも拘らず、予想以上の成果を上げることが出来た。訪問先はどこも友好的で私達の訪問を歓迎してくれ、再交流プログラムにふさわしく、更に親交を深めることが出来たと思う。

日程はタイトで、ややプログラムを詰め込み過ぎた点はあるが、受け入れ側の熱意の感じられるものだった。各訪問先で必ずしも本調査の目的が理解されておらず、突っ込んだ意見の交換は出来なかったものの、可能な範囲で「21世紀のための友情計画」に対するブルネイの評価等、情報を収集するよう努力した。

ホームステイでは、オフィシャルな訪問では見られなかった普通の人々の暮らしぶりに触れる事が出来、生活習慣の違いにカルチャーショックを受けるなど、貴重な経験をする事が出来た。

全体として、参加者・受け入れ側相方の努力で、当調査の目的がほぼ達成できたと考える。

3. 現地活動報告

3-1 表敬、訪問先における意見交換内容

教 育 省

学校局長の他、関連局の担当官5名が出席し意見交換を行った。21世紀プログラムに関して教育省では、学生・教員の選考を担当しており、その点について主に日本側から質問を行った。参加者の選考基準についての質問に対し、大学関係者からは1.大学への貢献度、2.行動力、3.学業成績の3点をポイントに選んでいるとの解答を得た。学生の日本に対する関心は年々高くなっており、大学での第2外国語として日本語の人気は高く、現在4コースが設置されている。これは貿易など日本とブルネイの関係が緊密になっていることの反映であるとの意見であった。

ハンディクラフト・トレーニングセンター

同センターは、1975年に伝統工芸技術を守り、発展させようという国王の意見で設立された技術専門学校で、文化青年スポーツ省が管轄している。中等教育を終了した青年が機織り、木彫、鍍金等の伝統技術を習得しており、現在までに約300名の卒業生を送り出し、職能者の育成に貢献してきた。同センターの見学の後、担当官によって以上のような概要説明が行われた。

文化青年スポーツ省次官表敬

何度か来日経験があるという同省次官が、日本及び日本の青年に対する印象を語られた。

次官は提出されてくるプログラム参加青年のレポートに目を通してあり、「21世紀のための友情計画」に対する評価は高く、今後もこのプログラムを発展させて欲しいとの希望を述べられた。

福祉青年スポーツ局

同局次長より「21世紀のための友情計画」の直接担当省庁である、福祉青年スポーツ局についての概要説明を受け、質疑応答を行った。(内容については4の青少年団体の活動状況を参照のこと)

ブルネイ大学

教育省カリキュラム担当官よりブルネイの教育制度について説明を受けた後、大学関係者から大学の概要説明があった。同大学は1985年創立で、行政学部・芸術社会学部・自然科学部により構成されている。現在のキャンパスは仮校舎で、1993年には移転する予定である。創立間もないため設備、内容とも充分でなく、教員等スタッフの88%を外国人に頼っており、毎年相当数の学生を海外の大学に留学生として送り出している。今後徐々に充実させて行きたいとのことであった。日本人スタッフはおらず、日本への留学生も数人だけで、大学レベルでの日本との関係は今のところあまり深くないのが現状。

大学関係からの参加者も同席していたが、時間があまりなく簡単に挨拶を交わした程度の面談となった。「21世紀のための友情計画」参加を契機として日本に留学したいと思った人はいないかと訊ねたが、積極的な希望者はいなかった。

歴史センター

イスラム教を中心としたブルネイ王国の成り立ちと歴史について、館員の説明を受けながらセンターを見学した。館長は第2次大戦中、日本語の通訳として働いた経験があるため日本語が堪能で、日本についての思い出話をしたりもしながら、イスラム教の教えについて説明を受けた。

工科専門学校

同校は1981年の設立で、現在122名が在籍。コースは経営学、電子工学、電算情報システムに分かれており、学位ではなく終了証を与える。学生は一般学生の他、社会人学生(週2回程度通学)が多いことが特徴と云える。ブルネイではトップレベルの知識人と下級技術者が不足しており、ここでもスタッフ41名中31名が外国人である。国の近代化、コンピュータ導入に伴い、中級技術者や経営者の養成も急務となっている。社会人学生が多いことにはこのような背景がある。

学生は国から手厚い保護を受けており、学費が無料であるほか、毎月決まった額の食事代・衣服代・書籍代、眼鏡代などが支給される。社会人学生も授業のために仕事を休んでも減給されることはなく、ブルネイがいかに人材養成に力を入れているかが伺えた。

シナウト農業センター

1964年、将来の農業技術者及び経営者を養成するために設立。当初は小規模農業の研究を中心としていたが76年からトレーニングコースを開設し、稲作をはじめとする技術研修を行うようになった。参加資格は18歳以上で、現在男女併せて約80名の研修生がいる。

石油によって財政が成り立っている同国での農業の衰退は激しくて、20万の人口に対して農家は約500戸にすぎない。食料自給率は著しく低く（米-6%、野菜-39%）、政府は米の自給率を30%まで引き上げることを目標にし、助成金を出したり、ハイテクを導入した近代化を図るなど、農民を保護している。しかし、当センターの修了生も多くは農業省の役人になったり、商業活動に携わるなど、必ずしも農業に従事するわけではなく、後継者問題など日本とも共通する問題を抱え苦慮している。

アジア各国・イギリス・オーストラリアを中心にした国々から指導者を招いており、日本からも講師を受け入れている。

MCファーム

三菱商事とブルネイ政府による現地法人として1978年に設立。予備調査、開墾を経て80年から事業計画を開始。総面積1200エーカー、内450エーカーを使用し牛450頭を飼育中。日本人スタッフ2名、ローカルスタッフ36名。

目的は、

1. ローカル農家に食肉用のもと牛を供給する。
2. ブルネイに適した牛の飼育法を開発する。
3. 畜産技術を補填し、後継者を養成する。

畜産は一応成功したため、現在は水耕栽培を利用した高級野菜の栽培の実験に取りかかっている。日本の農業技術を熱帯にそのまま適応することは出来ないが、土壌改良などによって農業使用量を減らすなど有機農業にも取り組んでいる。ローカルスタッフは技術習得に熱心であり、徐々に権限の委譲を図りつつある。また日本への研修生派遣も実施している。

テクニカル・トレーニングセンター

JICAのプロジェクトとして、三菱キャタピラ社員が専門家として派遣中。概要説明を受けた後、センター内を簡単に見学した。

林業プロジェクト

1985年ブルネイ政府の要請で始まった、林業研究プロジェクト。熱帯林の生態、造林、経営を研究している。ブルネイは国土の80%が熱帯林に覆われており、内70%は未開発のまま残されている。また1400種以上の種によって構成された多様な熱帯雨林である。当初は森林開発が目的であったが、石油によって潤っている同国は、隣国マレーシアのように森林を破壊して木林を輸出する必要はなく、むしろこの多様な森林を、熱帯林研究の為に生かすべきだとの当センター古越氏の提言で、開発から保護へ方針が変更された。90年9月にこのプロジェクトは終了するが、その後も同センターを長期的視野に立ってフォローアップしてゆきたいとのことである。

3-2 帰国青年同窓会等の活動状況

同窓会 Alumni Society 21st Century は、1988年8月23日に政府登録団体として設立、「21世紀のための友情計画」と東南アジア青年の船参加者、約200名のメンバーを有する。今までのところ帰国報告会開催等の活動はまだ行っていないが、今後、日本に関するセミナーの開催を計画している。当アフターケアチーム他、日本からの訪問者がある場合は、同窓会が中心となって受け入れ交流を深めているとのことである。

ブルネイ政府はもとより、日本大使館は機会あるごとに同窓会を招待するなど、活動を支援してくれているそうだ。最近、大使館の援助で84年～88年の参加者レポートを出版した。(添付書類参照のこと)

組織図、役員及び会員名簿等、ドキュメントの提出を再三求めたが、入手できないまま帰国の日を迎えてしまった。

3-3 セミナー、交流会実施状況

初日のタイプ氏宅での夕食会、日本大使館、福祉青年スポーツ局の夕食会には、常に同窓生が招かれており、食事を取りながら和やかな雰囲気の中で親交を深めることが出来た。訪問先ではブルネイ大学で参加者と面談できた他は、時期的に休暇に入っていたりして直接意見を交わす機会はあまりなかった。(内容については相手国側の評価を参照)

出発前日のパーティーは、出席者70名以上の大交歓会となった。また、アフターケアチームメンバーの家庭にホームステイした青年達が、ホームビジットの機会を何度も設けてくれ、温かい遇しを受けた。

3-4 ホームステイ実施状況

僅か1泊2日のホームステイではあったが、ブルネイの生活・習慣を知る意味で、大変盛り多いプログラムであった。受け入れ家庭は同窓会関係の中流家庭(添付リスト参照)で、公務員住宅に住む家庭もあり、ブルネイの普通の人々の暮らしぶりを知る貴重な経験であった。

ブルネイ側の受け入れ準備期間が短く、関係者に説明が充分できなかったという事情もあるようだが、日本のように至れり尽くせりというのではない、ブルネイ流の歓迎の表現に惑うこともあったが、それもまたブルネイのありのままの姿を知る機会であった。

3-5 その他

各訪問先で、帰国後日本での経験を職場や学校の同僚にフィードバックしているかを訊ねたが、オフィシャルな報告会を開いている所はなく、インフォーマルに家族や友人に日本の話をしているということであった。また、参加レポートも文化青年スポーツ省に提出されるため、参加青年達の体験を殆ど現場にフィードバックされていないという印象を受けた。

本調査チーム受け入れに際し、在ブルネイ日本大使館、米田公使及び小原一等書記官のご協力に特にお礼を申し述べたい。

4. 訪問国における青少年団体の活動状況

ブルネイに於ける青少年団体活動については、文化青年スポーツ省・福祉青年スポーツ局が管轄している。同局は、団体登録制度をとっており、登録団体は国及び自治体援助を受けることが出来る。現在、地域又は国家評議会に登録されている団体数は約300以上あり、それぞれ独自の活動を行っている。同窓会も登録団体の一つである。

教職員協会、看護婦協会などプロフェッショナル団体もあるが、主な活動分野はスポーツ・レクリエーション活動であり、相当数の青年が何らかの団体に属している。一方、福祉等のボランティア活動はあまり活発ではない。どこの国にもあるように、ブルネイにも少年非行や麻薬中毒などの社会問題はあるが、ブルネイは小さな国であり、対策もたてやすくそれほど深刻ではない。(2年前に麻薬中毒者のリハビリセンターを設立したが、リハビリを必要とするのはたった27人だけであった)。財政的にも豊かで福祉制度も充実し、青年達が何か不満を持って訴える必要が殆ど無い。また国として青少年の健全育成に力を入れていることも特徴と云える。

国際交流活動としては、WAMY(世界ムスリム青年協会)、CYO(コモンウェルス青年評議会)、AYC(アジア青年評議会)に加入しており、これら団体を通して交流活動を実施している。1985年国際青年年には、様々な交流プログラムに参加した。また88年には神戸で開催されたパラリンピック(障害者スポーツ大会)にも代表団が参加した。ボーイスカウト等の活動も盛んである。

「21世紀のための友情計画」参加者選考に当たっては、このような青少年団体での活動を評価し考慮している。

5. 青年招へい事業に対する相手国側の評価

1. 教育省・文化青年スポーツ省・福祉青年スポーツ局

ブルネイでは、韓国の青年キャンプ、台湾やトルコとの青年交流プログラムにも積極的に青年を派遣している。日本の「21世紀のための友情計画」、「青年の船」、の二つの交流事業は、毎年確実に規模が拡大していくという特徴がある。招へい事業が継続され参加者が増加する中、ブルネイ青年の間で日本に対する関心が高まっている。日本語学習者の増加はその一例であるが、その背景には日本の技術、経済力を評価し学んで行きたいという欲求がある。

招へい事業に対する政府の評価は高く、今後とも継続して欲しいとの要望を得た。

2. 参加青年

「21世紀のための友情計画」に対する同窓生評価は高いが、幾つかの改善要望も提出された。

評価としては、実際に日本に行ってみて、テクノロジーが発達している国であるにもかかわらず、日本人は親切・丁寧であることがわかった、第2次世界大戦経験者から聞かされていた日本(人)のイメージが、良いもの変わった等の所感が出された。

改善点としては、研修内容がハード過ぎる。特に、1カ月間にプログラムが詰め込まれ過ぎて、移動も多くもう少し余裕を持ったプログラムを作りたいという意見が多かった。また、再訪問の機会を是非設けて欲しいとの要望が強く出された。

6. 調査チーム参加者の感想

ブルネイ国アフターケア調査団同行報告(感想)

(財)国際協力サービス・センター

国際交流部 菊池周平

1. プロローグ

21世紀のための友情計画事業の共通プログラム実施担当者として、今回のアフターケア調査団同行旅行は、初めての相手国訪問であったし、期待するものが少なからずあった。特にブルネイについては若干の情報があったものの、私にとって殆ど未知の世界であり、それだけに尚更このプログラムには関心を寄せていた。

ブルネイに関するそれまでの私のイメージは、突然沸き上がった石油と液化天然ガスによって世界一の金持となった国であり、ボルネオ島の中にあつて殆どマレー民族によって構成されており、回教を国教としている人口20万程の小国、という程度のものでしか無かつたし、実際渡航する前の資料調査によってもそれを越え出る知識は特に得られなかつた。

2. 始まり(ホテルから即表敬訪問へ)

12月11日シンガポールから調査団一行を乗せたSQ456は定刻どおり11時ちょうど

にバンダル・スリ・ベガワン空港に到着した。空港内には大使館から館員が既に待ち受けていたし、税関を通るとそこには数十名の同窓会員の歓迎が待っていた。一行はホテルに着くと休む間もなくすぐに今回のプログラムコーディネーターである文化青年スポーツ省担当官のタイプ氏から今回の調査プログラムのブリーフィングを受け、そのあと直ぐ教育省学校局長表敬訪問へと出発した。これがこの後8日間続くハードなスケジュールの始まりだった。

3. 街の景色

ブルネイには表面的には2つの顔がある。一つは車に乗っている時に目に入る真新しい官公庁やモスクの姿であり、またきれいに整備された道路とおびただしい新車の数である。これらがこの石油収入によってえた急速な経済成長のシンボルであり、世界一の金持国の象徴である。従って道路を車で走っている限り、ここには他の東南アジア諸国に見られる第三世界特有の表徴、つまり道路を埋めつくす小型バイクや庶民のための乗合バスや人の群れ、街路からはみ出る屋台、こうしたものは不在なのだ。

しかし一方、ブルネイには生き続ける固存の風景がやはり残っている。私達一行が宿泊したナショナルインはこうした旧市街に属しており、そこから更に歩いてゆくとすぐに水上部落といわれている住民の生活舞台がある。ここでは家々は基礎から川の上に建っていて見事な集落を成しているし、学校や病院、商店街も形成されていて、文化・経済活動さえ行われているのだ。車はここでは役に立たず、住民は交通手段として専ら徒歩かモーターボートを利用している。さらにこの水上部落を横切り対岸に出ると経済の中心地である市街があり、その横には東南アジア諸国ならどこにでも見られるオープンマーケットがある。

この2つの風景のコントラストがこの国の国際市場に置かれた経済の特殊な状況をそのまま象徴しているように思う。

4. 表敬訪問

表敬訪問及び施設視察は主に文化青年スポーツ省及び教育省、その関係機関、そしてJICA等日本の援助機関を廻った。各省庁では破格の待遇で私達を接遇してくれたし、また多くの関係者や青年が私達のために貴重な時間をさいてくれた。これらの表敬訪問や施設見学を通じて私達はブルネイ国における教育、文化、福祉、青少年問題、経済、地域振興、農業問題等の現状を学び、多くの人の様々な意見を聞くことができた。

しかし反面、スケジュールが余りに細分化していることと、各省庁訪問が儀礼的に過ぎたため、質問や調査――友情計画での日本体験の帰国後の活用、青年の日本に対する意識、友情計画プログラムに対する関係省庁の評価、青年の本プログラムに対する実直な感想等――は十分にできないままに終わった。今後の課題は本アフターケア調査の目的を相手国に伝え、必要な調査事項については担当者レベルで比較的ゆっくり会談のできる機会を設けてもらえるようにすることであると思う。

5. 帰国青年との交流

帰国青年とは色々な形で交流を行うことができた。オフィシャルには2回だけだったが、歓送迎会や個人的なホームビジットを含めると日々交流の連続であったと言える。彼らの日本に対する印象は極めてよく、特に今回日本でホストファミリーだった人には帰国青年が非常なもてなしをしてくれた。

ただブルネイ人の国民性なのかどうかは不明であるが、それだけ日本に関心をもっているならもっと日本の事を自分で勉強すれば良いのではないのかと思うのだが、そうではない。これはこの国の教育システムがいまだにコモンウェルスに依拠していることに理由があるのかもしれない。

実際日本熱は高まっているのだが、現実的には英語が出来ることがインテリの証となり、大学でも講師は殆どコモンウェルス加入諸国から派遣されているのである。日本について学ぶことが実際利益を生まない以上、日本への関心は今後も表面的なレベルに留まることが想定される。実際的に交流といっても、相互の青年が具体的実利を前提としないかぎり深化するものとは考えにくい国際状況がある。

6. ホームステイ

ホームステイは12月14日(木)から15日(金)にかけて行われた。現在の視察団員の心情は分からないが、確か視察旅行中一番評判が悪かったのが確かこのホームステイプログラムではなかったかと思う※。

14日の夕方、4日間の比較的きついスケジュールを終えて私達はホテルのロビーでホストファミリーを待っていた。それから三々五々ホストファミリーが現れ、団員を各家庭に連れていったが、私を待ち受けていたのは何と当初の受入予定の家庭ではなかったのだ。彼の兄弟が私を本当に受け入れることになっていたのだが、理由不明のまま、わたしはその弟の家で連れていかれたのだ。その主の話によると、その前夜兄から電話があり、承諾させられたとのこと。私は始め非常に憤りを覚えた(日本ではプログラム中こうした点は各担当者は一番気を使っている)が、気をとりなおし、疲れた事もあってその夜はそのまま早めに床についた。

驚いたのは翌日全員がホテルに帰ってからその話をしたとき、他に2名(つまり5名中3名)も同様の体験をしたというのである。彼らの国ではこうしたことは当たり前でよくある事かもしれないし、また今回のプログラムコーディネーターも一生懸命やったとは思いますが、しかし日本でホストファミリーをした人の心情を考えると、この点についてはきっちり相手国に伝えるべきであるように感じる。

さて、私が泊まったのはシャリカート氏といって32才の小売商を父親と共に営んでいる、妻と3人の子持ちの近頃では平均的なブルネイ市民であった。彼の家は最近郊外に新築されたばかりの半水上建築様式(川の沿岸に建てられている)である。彼の祖父は1959年に

ブルネイがイギリスから自治権を獲得した時、調定式に参加したほどの高族であったというが、この辺はよく他のブルネイ人も同じことを言うので、実情は分からない。

どのブルネイ人の家もそうだが、彼らの家に入るとまず大きなりビング(20畳程)があり、椅子と調度品がすらりと並べられている。ただこの家では他の部屋や台所、トイレ等が前に訪問した他のブルネイ人(タイプ氏等)から比べるとより庶民的な感じがしたが逆にこれでより平均的なブルネイ人の生活を知ることができたのだと思う。

翌日私はこの家の主人と子供たちと一緒にいくつかの博物館や市内を見学し、そのあとで彼の水上部落の実家に行った。水上部落は川辺に基礎を築いた高床式の住居群であり(「3. 街の景色」参照)、アジア最大のもと言われている。市の中心部から細く長い木でできた廓下の両側には色々な小物商などが建ち並び(そこにも華僑が多い)、途中から何方向にも枝別れする街路は暫しそこを水上部落と忘れさせてくれるぐらいの、あの東南アジアの下町特有の、迷路へと化してゆく。

彼の実家も川の一番縁に建っているのだが、家の中にいるかぎりそこが水上にあるなどとはとても意識させない。ここにも同じく大きなりビングがあり、椅子がすらりとならべられ、奥に寝室があり、更に食堂・台所・バスルームへと続いてゆく。

この水上部落には車は入れないが代わりに便利な水上タクシーが走り回っている。私達はこの水上タクシーに乗ってこの一帯を見学した。一見限り無く広がるように見えるこの水上部落を水上から眺め、私はこの日初めてブルネイ人の生活舞台を見た思いがした。

※このホームステイプログラムが評判の悪かった他の理由はここに記した以外に多分に日本人がブルネイの生活様式等と感じた一種のカルチュアショックによるものである。

7. 国 王

どの家でも、どのオフィスに入っても、まず最初に目にするのが国王の写真なのだ。国王はサルタンであり、行政上の首相なのであり、この国の殆どの土地の所有者であり、石油権益の所持者であり、要するにこの国におけるあらゆる権力の独占者なのである。と同時に、国王は慈悲深く、国民に自分の財産を分け与えようとする。そのため、国民は多く公務員になれるのだ。15世紀頃から長く続いてきたブルネイ王国のアイデンティティはおそらくこの国王の存在ぬきには語ることはできない。それがこの小領土及び小人口をもって一国としての統治権を有しめている存在理由なのだ。だからブルネイではマレイ語を話すけどもマレイシアではない。

8. コーラン

この国でもう一つ国民の精神的支柱となっているのがイスラム教である。朝の4時頃からお祈りは始まり、一日4回このお祈りは繰り返されるのだ。モスクは居住区の有るところならいたるところにあり、住民にお祈りの場所を提供する。街を歩いていても、車に乗っていても、オフィスに居ても、いたるところでラウドスピーカーやラジオが決まった時間になる

とお祈りを流すのだ。テレビでは大半の時間がコーランのプログラムで占められている。あの意味でこの国では数学の公式を覚えるよりも、コーランの一章節を覚える方がより重要であるかのようにさえ思えてくる。

実際に彼らは幼少の頃からコーランに接し、初等教育からコーランを学び始める。私達が視察した技術専門学院や訓練センターでさえ教室で学生が真剣そうなまなざしでコーランを学んでいるのだ。

仏教やキリスト教と違い、聖界と世俗を区別しないコーランの戒律は厳しく、衣食住などの日常いたるところで生活は律せられる。異教徒である私達日本人にとってこの宗教は理解しにくく、またそのために些細なことで「文化摩擦」を生じさせやすい。日本人は伝統的に他宗教に対しては寛容であるため、その存在自体は認めるという利点はある反面、それを内心では軽蔑するという欠点があることは否定できない。ところが内心ではという心の表情が、実は表に出てしまうのだ。

私自身が後で思うと随分無神経なことをしたと反省する点が少なくない。これはどの回教諸国に対しても(またそれ以外の国々に対しても言うまでもなく)言えるのであるが、それぞれの立場や考え方の違いを認識した上で交流してゆくということを、他国から私達はもっと学ぶ必要があるように感じる。

9. 植民地の遺産

先に英語教育のこの国に於ける重要性についてのべた。大学でも、専門学校でも農業実験場でも、派遣されてくる講師はほとんどコモンウェルス諸国出身であり、中でもイギリス人が一番多いのだ。また学生が留学する国もほとんどコモンウェルス諸国でありイギリス留学体験はそれだけで将来が保証されるのである。

実際子供たちのほとんどは小学校に入る頃から英語を学び始める。なにしろこの国では2か国語教育が基本政策であり、英語ができないことには高等教育は受けられないのだ。これは今日の世界の傾向、技術水準とまるでかけはなれた文化・教育システムであるが、イギリス人がこの2~300年の間に獲得した世界に対する権益と既得権の計り知れない巨大さを一般の日本人はもう少し認識すべきであろう。

とにかくも、ブルネイ人は一方でコーランを脇に抱え、他方で英語を勉強するのである。日本に対してはようやくそのイメージが変わりかけてきた段階にしかすぎない。彼らを日本に200人も招聘したのだからもう少し日本のことを理解してもらってもいいだろうと思うのは早計に過ぎるし、こちら側の勝手な解釈なのだ。

10. 砂上の楼閣?

先に「街の景色」で触れたこの国の豊かさについてももうすこし言及したい。

この国の富(対外収入)の殆どは石油と液化天然ガスに依存している。1984年にこの国が独立して、そのために急いで国家としての体裁と制度を整えたため、人口20万そこそ

この国民の大半が公務員になってしまった。例えば農民の数が500人しかいないのに農業省の役人は2000人もいるのである。道路工事夫も外人、大学教授も外人、この国には外人が溢れている。またスーパーマーケットに行けば、そこにうずたかく積まれている日用品の全ては輸入品なのである。要するに、この国には石油資源の他に何一つとして産業らしい産業は存在しないのだ。さらに他の東南アジア諸国の例にもれずこの国でも経済は華僑によって握られているのである。

同窓会員との懇談の席で私達一行の内の1名が「ブルネイでは石油の産出はあと15年とされている。今あなた方は石油収入で生活レベルを向上させているが、15年たったらどうするのか」と聞いた。これに対して同窓生の1名がこう答えたのだ。「アラーの神は世界中のイスラム諸国に石油という多大な恩恵を与えてくれた。これは私達の信心深さのお陰である。もし仮に石油が無くなったとしても、神は私達を決してお見捨てにはならないだろう」。

確かにこの国では貯蓄や海外投資を行っていて、それなりに将来に備えていると聞き、また先のことを心配するのは彼らの問題であって、私達のすることではない。しかしこの楽観さもまた彼らの民族性なのか。ここにもまた私は「文化摩擦」をおぼえた。

11. エピローグ

12月18日当プログラム最後の日本大使館表敬訪問を終え、私達は日本への帰路についた。空港へは私達の受入家庭の皆様や青年達が見送りにきてくれて、互いに別れを惜しんだ。このアジアの不思議な国、ブルネイを後にして皆胸中過るものがあつたと思う。私自身、短いながら、この国での体験によって日本での生活を反省する契機になった。

今回のプログラム中、同窓生との懇談会の席でも、また他の機会にも私達はよく「日本人はワーカホリック(働き病)だ。なぜもっとリラックスできないのか。そうまでして働いて、家族を犠牲にして、何も感じないのか」と質問された。たしかにブルネイにいと日本人は悲観的民族のような気がしてくる。常に明日は絶望的運命にあつて、そこから逃れるためには働くしかないという一種の国民的ノイローゼに罹っているとも感じられなくはない。

しかしこれもまた文化交流なのだ。ブルネイ人のように金が有れば有るで使えば良いし、無ければ無いでなんとかなると考えるのも一つの文化であり、私達はその価値観にけちを付ける道理はなにもないのである。むしろこうした文化的価値観の相違を認識するところから国際交流の一步が始まるのではないか。

私個人もプログラム担当者として彼らに日本を紹介することに腐心してきたが、同時に彼らを通して彼らの文化を理解することも、日本紹介に於いて重要なことであるし、ひいてはこれからの長い交流につながっていくのではないのかと、今回の旅行を通じて痛感したのであるし、またその意味で逆に日本青年にも海外に行く機会を増やしたらよいと思っている。

ブルネイという国を一言で表すと、日本とは対照的な国という言葉が合いそうである。豊富なエネルギー資源、低い人口密度、強い政府、強い宗教、少い労働意欲（と言うより労働そのものがないように思える）、大家族、イスラム的倫理観（性、飲酒など）ときりもなく挙げられる。似ているのはま新しいクルマ。日本よりも日本車の割合が高いと思えるほどの、どのクルマもきれいで、アメリカのへこんだ整備不良車の風景とは異なる。

今回のブルネイ行きの少し前に、日本での合宿セミナーに参加することができ、アセアン6カ国の青年を知る機会に恵まれた。いずれ劣らぬ精鋭揃いというのがその時の強い印象であった。正直に言って、私の専門のせい、欧米にしか目を向けて居なかった私にとって、優れた人々がアセアン諸国にあれば居ることを知ったことは、一種の驚きでさえあった。

果たせるかなブルネイに到着すると、かの懐かしい友人達が出迎えに来ていた。彼らの多くは英国留学の経験を持ち、中には学位を取得した人すら居る。ブルネイでもかなりのエリートに属する。ただ、富めるブルネイにとって、英国留学は我々が考えるほどに大変なことでは必ずしもない。このことは、その後会った幾人かの留学経験者との会話から容易に察せられた。

さてそれではブルネイの高等教育はどうなっているのか。仕事柄この点にはおおいに興味をそそられた。結論から言って、高等教育なるものは自国にない。したがって、マレーシア、インドネシア、かつての統治国である英国に頼らざるを得ないそうである。できたばかりのブルネイ大学は機能していそうになく、工業高専に相当するところも、とても高等教育と呼べるものではなかった。経済的には先進国並みでも、知的には近隣アセアン諸国に及ばない。経済の優越がむしろ他分野の発展を阻んでいるとも言える。

ブルネイ滞在中、私は妙になじめぬ何ものかを常感じていた。それは、米国でも中国でも韓国でも感じたことのないものであった。それが、日本との（英国ではない）協同事業見学の際には消えたのである。活気に満ちた指導者達と会うことでようやく落ち着いた気分を取り戻すことができた。あのなじめぬ雰囲気とは、先に述べた経済的先進性と知的後進性のゆえかも知れない。すなわち、向上意欲を発展のために全く必要としないかのような歴史的特殊性に基づいているように思われる。知的未成熟の社会に、文字通りふってわいた地下資源が、人々を世界一の物質文明に浴させている様子は、むしろひどく悲しげであった。それでは、我々先進国の人々が享受している現代文明とは何なのか。はからずも文明と人々の幸福というとても大きく大きな問題に突き当たってしまい、訪問中毎夜同行の団員と文明論なる議論を行うはめになった。ここにそれを開陳するほどにそのものがまとまっている訳ではないが、折しも東欧の激変、地球規模の環境問題の深刻化とあいまって、トロピカルな夜は、

華僑系レストランのビールで高揚した我々のすばらしい時とともに更けていったのである。

さて肝心の国際協力についてであるが、先に述べたように日本との協同プロジェクトに関する限り極めて有意義に進んでいるように見えた。それは、ひとえに現地日本人の熱意と努力(この言葉ほどブルネイに似合わないものはないようであるが)に支えられていることは明らかである。また、21世紀プログラム参加経験者は相当のカルチャーショックを受けているのも明らかで、「これではいけない」といった意識を、明日を担う青年達に植え付け、今回のアフターケアでそのことを更に強く意識させたと私自身が感じる事ができたのは一つの収穫と言えよう。そしてどのようなことにおいても、モノではなくヒトが最も大切であることを今回も深く感じた。この意味において、日本の大学人の一人として、特に高特教育の分野で我々が貢献できることは意外に多いように思える。当然先に述べた文明論を余り深く考えないという但し書きが付く。

それにしても、たわわに実るバナナと、豊富な魚貝、かの美しいトロピカルアイランドに100km/hを超えて疾走する自動車やエアコンがどれだけ必要なのだろうか。こんな問いかけは勿論自分自身にも返って来る。短かい10日間足らずの間に行った文明論はまたしても執拗によみがえって来る。私が一生の間にそう多くは持てないであろう輝けるあの時間に、私は言葉で表せないほどに大切なことを考える事ができたような気がする。まだ自分の中で全くまとまっていない考えを、これからどうやってまとめてゆくか。一生のテーマがまた一つ削られたようである。

ブルネイ調査チームに参加して

渡 辺 恵 子

青年招へい事業ブルネイ・アフター・ケア調査チームに参加させていたゞいた。出発前に自分の仕事を片づけるために味わった、あの思い出すのもいやな忙しさから抜け出して、飛行機のシートに座った時の嬉しさは、今思い出しても顔が自然にほころんでくる程である。

ブルネイの人達のあのあたゝかい笑顔とホスピタリティー。たった八日間だったのに、どれ程多くの方々に親切なもてなしを受けたことだろう。目を閉じると、次から次へといろいろな場面や人の笑顔が脳裏に浮かんでくる。

まず出発の前日、東京上野のホテルにチーム五人全員が集合、初顔合わせとなる。打ち合わせ等を終えてから、現地のパーティーで出す余興の練習をすることになった。歌を教曲と、八木節の踊りである。この踊りは、メンバーの一人である太田の中学校の木村先生が習ってきて我々に伝授(?)して下さるのだが、肝心の先生が、時間が足りなくて完全には覚えておられなかったので、踊りの練習をしながら皆で、あゝでもない、こうでもないと喧喧囂囂。おかげで初対面の男性三名、女性二名、計五名のチームの全員が打ちとけて親しくなった。

しかし、八木節の踊りの方はどうも最真目に見ても、ラジオ体操の域をはず、また後日現地

で練習の続きをすることになった。

翌十二月十日、心配されていた京成スカイライナーのストもぎりぎり解決。成田に向かった。

成田発十時四五分SQ182便でまずはシンガポールに飛ぶ。皆出発間際まで忙しく、何とか各自の仕事を片づけて集まった人ばかりなので、機中では全員良く眠った。私などは食事時間以外は聴も外聞もなく眠りこけた。

目が覚めるともうシンガポール。ここはさすがに暑い。チーム・メンバーの一人、国際協力サービス・センターの菊池さんが前もって連絡なさっていたので、地元の帰国青年達が何人も空港まで出迎えに出ており、感激した。その中の三人に夕食に招待していただき、早速ホテルに荷物を置いて夜のシンガポールにくり出す。数年前に訪れた時には影も形も無かった地下鉄に乗った。清潔さを誇るシンガポールの中でも、この地下鉄は特にピカピカで豪華である。食事は戸外の大衆食堂のような所で、サテーと呼ばれるシンガポール風焼き鳥のようなもの、野菜とエビを炒めた料理、少々変わった焼きそば等、いずれも美味。旅の第一夜の夕食を星夜の下でとり乍ら「もう旅は始まったのだなあ」と実感した。この国ではさすがに買物天国と言われるだけあって、夜遅くまで店が開いており、人出も多い。

二日目は朝早くホテルを出ていよいよブルネイに向かう。この飛行機の中では前日と違って少々緊張が伴なり。メンバーの中にはひざの上に書類を広げている人や、スピーチの草案をねっている人もいる。

飛行機がブルネイに着くと、日本大使館の一等書記官である小原氏、それからブルネイ側からは同窓会事務局長のタイプ氏が出迎えて下さり入国手続きも簡単に済んだ。空港ロビーは大勢の青年達で華やかに賑わっており、この人達は我々を出迎えるための帰国青年と聞いてびっくりした。ロビーでは彼等が一列になって、私達と握手をするために次から次へと進んで来る。一言づつあいさつを交わし乍ら握手。女性は殆んど全員と言っても良い程、バジューロンと呼ばれる民族衣装を着ている。これは鮮やかな色とりどりの布で作った、長袖、ロング・スカートの服で、とても美しく、エレガントである。頭にすっぴりとスカーフをかぶって頭髪が人の目に触れないようにしている人も、何人も目についた。聞いたところによると、これはイスラム教の教えで、肌や頭髪を露わにして男性を挑発しないようにするためだそうである。しかし、やはり近代化はブルネイでもご多分に漏れず、後程、街で見かける女性の中にはスカーフをかぶっていない人も多かった。何しろ暑い常夏の国である。

車二台に分乗して中国系のホテル(ナショナル・イン)に着いた。ここはいわゆる高級ホテルではなく、浴室にはバス・タブもないが、お湯のシャワーが使えるのはありがたい。ホテルで、タイプ氏によるブリーフィングがあった。行程表によると、連日午前も午後も、予定がびっしりである。まず当日の午後、教育省を訪問することから始まって、ざっと挙げてみても、文化青年スポーツ省、福祉青年スポーツ局、ブルネイ・ハンディクラフト・トレ-

ニング・センター、ブルネイ大学、ブルネイ歴史センター、日本大使館、ブルネイ工科専門学校、シナウト農業研修センター、マック・ファーム、技術研修センター、林業研究プロジェクト等を訪問し、さらに同窓生とのミーティングや連日の夕食会、パーティー、時には昼食会もある。

タイプ氏は張り切って、「さあがんばっていきましょう。」という感じである。

結局全日程をこなしたわけだが、毎日の訪問やミーティングの中で、特に感じたことがいくつもあった。まず、ブルネイというお国柄である。ここは石油と天然ガスが産出されるために、非常に経済的に豊かな国である。工業、農業その他の産業が発達していないため、その方面で働く人の数は少なく、労働人口の70パーセント前後が公務員だということである。例えば農業関係のお役人は、農業に従事している人数の十倍だという。

そのせいか、どこを訪問しても忙しそうにとげとげした雰囲気は感じられず、必ずコーヒーと紅茶、それにブルネイのお菓子をいただいた。官庁とて例外ではない。何種類ものお菓子をいただいてお腹がいっぱいになったこともあった。

豊富な天然資源により、世界一リッチな国なので、税金はなく、病院も無料。学校は海外留学まで含めて無料ということである。従って国民にハングリーな感じはなく、あらゆる面でゆったりとしている。今回の旅行では、学校の先生方と話す機会が多かったが、学校の授業は午前中だけで、午後は特別な事がなければ家へ帰ってしまうそうである。子供達にも勉強に対する悲愴感は余り無いように見られた。偏差値重視の学校教育の下で、おしつぶされそうになって塾通いをしている、日本の子供達と比べるとどうであろうか。

また学校教育は小学校から英語を使って行なわれている。子供達は校内では英語、校外ではマレー語を使い分けているのであるが、これは長い間イギリスの保護領だったブルネイでは、マレー語で書かれた教科書が満足ではなく、特に学年が進んで学習の内容が高度になるにつれて、マレー語では十分な勉強が出来ないということらしい。

私が出逢った範囲、特に後述のホスト・ファミリーの親戚廻りをした時の感触では、若者でも、余り英語が堪能でない人々が多く見うけられ、バイリンガル教育でも、日本人ほど教育熱心な親ばかりではないのだなあとと思った。

もう一つ印象的だったことは、イスラム教の、国民に及ぼす影響である。我々のメンバーの一人が、少々ぶしつけだが、重要な質問をした。「現在は石油も天然ガスも豊富に産出されているが、将来これらの天然資源が枯渇してしまった場合、特別な産業のないブルネイではどのようにしてやっていくのか。」

この質問に対して、ある官庁の偉い方が、「イスラム教の国々、例えばブルネイの他にもイランやイラク等では石油が豊富に得られており、我々がイスラム教の教えを守って生活していく限り、アラーの神は決して我々を見捨てたりはせず、永遠に産出し続けるであろう。」と答えられた。このように国民の大半がイスラム教徒であって、ユニティーということを目

標に生活している人々の団結は非常に固く、イスラム教に対する信頼度は非常に高い。

また、この石油枯渇後の経済問題に関しては、現在ブルネイの石油、天然ガスによる利益を海外で投資して莫大な利益を挙げ、将来に備えているということである。

帰国青年で作っている同窓会のメンバー十三人と行なった意見交換会では、いろいろな話題が出て興味深かった。ちょっと残念だと思ったことは、日本に来て得た経験を発表する機会は余りなくて、家族や友人に個人的に話す程度だということである。特にシナウト農業研修センターでは、帰国青年が、日本で得た経験を生かすチャンスがあるかという我々の質問に対して、説明者は自分の所属するセンターに日本に招へいされたことのある青年がいたことすら知らなかった。

ホーム・ステイは一泊だけであったが、ホスト・ファミリーが、担々と日常の生活のペースをくずさずに家族の一員として受け入れてくれた。私がお世話になったのは、タウン・プランニングの仕事をしている政府のお役人のヌールさんで、奥さんと子供一人、それにお手伝いさんを加えて、2LDKの官舎(アパート形式)に住んでいる。夜はインドネシア人のお手伝いさんと同室に寝た。

一泊二日のホーム・ステイの間に何軒の親戚に案内されたことであろう。ご主人の両親、兄弟姉妹のそれぞれの家に加えて、奥さんの両親や姉妹の家も訪ねた。どこにおじゃましても、温かく迎えて食物をいろいろ出していたとき、民族衣装もあちこちでいただったので、とうとうそのうちの一着を着てホーム・ステイの日を過ぎた。ブルネイ人だからなのか、それともイスラム教徒だからなのか私にはわからないが、特に親子の絆が強く、結婚して家を出ても、週に何度かは親の家を訪れるのが当たり前だそうである(ちなみに私は、岩手に住んでいる両親の家へ行くのは年に二、三回である)。

水上部落に住むヌールさんのご両親の家を訪ねた時には、すぐに彼のおばさんやお姉さん達が子連れでぞろぞろ集まってくれた。親戚がまとまってこの地域に住んでいるそうである。何か事が起きても自分だけの問題とはせず皆で助け合うのだという。この頃の核家族化が進んでいて、「個食」なんて言葉もできている日本とは違って、昔の日本におけるような血縁関係が今でもブルネイでは生きている。

八日間のブルネイ滞在中、ホーム・ステイで得た経験が一番鮮やかである。中でも習慣の違いに目を眩つた。家の中でヤモリがチョロチョロしていても、害虫を食べてくれるのだからありがたいとニコニコして見ていること、トイレで紙を使わずに水を用いること、夜ベッドに入ろうとしたら、お手伝いさんが白い袋状の衣をまとい突然目の前で敬虔なイスラム教のお祈りを始めたこと等である。17日は、先月日本に招へいされた時に木村先生のお宅にホーム・ステイした青年であるサレーさんの妹さんの結婚式に招待された。一緒に木村先生のお宅にホーム・ステイしたイディンさんと、私の家にホーム・ステイしたサブリスさんの二人が、奥様達も交えて私達をエスコートして下さった。船でブルネイ川を遡り、殆んど一

日がかりの行程であった。

サブリさんの奥さんが私のためにブルネイのドレス、バジュクロンを作り、持って来て下さったので、ありがたくそれを着て結婚式に出席した。会場はジャングルの中にある花嫁さんの実家であり、庭に大きな長い屋根だけのテントをいくつか張ってある。お客は約700人だったそうである。ブルネイの習慣で、招待された客は一人で何人も仲間を連れてくるので、何人集まってもよいように、ご馳走はバイキング形式。ただ男女の席はきっちりと別れていた。

花嫁さんは、きれいに飾りつけられた家の中に居て、外の我々の前には姿を見せない。お客も食事が殆まって適当に食べ終るとそのまま帰っていく。スピーチも無く、また日本式のドライ・アイスの煙の中からゴンドラでカップルが現れるといった演出もない。至って素朴なパーティーであった。

食事の後で家の中に入り、花嫁さんにお逢いした。きれいな民族調の花嫁衣装を着て、ちょっぴり緊張した面持ちで座っていた。

その後家の中で、この家の庭で実ったドリアンや珍しい果物をご馳走になり、新婚のカップルの幸せを祈りながらおいとまをした。

このように、各官庁や研修所の訪問で勉強したことの程かに民間レベルでも多くの方々にお世話になり、親切にしていた。人と人の繋がりは何と素晴らしく、感動的なものであるかを実感した。帰国してすぐにお世話になった一人一人に感謝をこめてカードを書いた。またいつか、きっと再会できることを祈りながら。

After-Care 調査に参加して

木 村 優

ブルネイの空港に着いたとき21世紀友情計画同窓生が大勢私たち5人を暖かく出迎えてくれた。シンガポールでの同窓生の暖かい心に触れ、そして今また、さらに大きい感激を味わっている。その中に去る11月4日、5日と私の家にホームステイされたイデイン氏とサレー氏の姿があった。そしてそこで初めて彼らは私がブルネイを訪れることになったことを知って驚くと同時に、余りにも早い再会を喜び合ったのである。

空港より私たちをナショナル・インに送るその車の中にガイドとして働く一同窓生が乗っておられた。ミス ザリハである。この人のお宅に私はホームステイすることをもはや知らされる。これからの一週間オフィシャルな訪問日程の間をぬってこの3家族が私を、そして時に私たち5人を招いて交流の時を持たせていただくことになるのである。うれしい斐鳴である。このようにしてよい人たちとの出会いとその人たちの配慮により二重にも三重にも充実した滞在となる。

最初に訪問した教育省は予想外にこじんまりしていた。しばらくして非常に威厳のある女

性が中央に座られた。Acting Director of Schools Ministry of Education である。ブルネイの教育行政については何の知識もなかったので一般的な大きな質問をしてしまった。教育省からみた現在の教育課題である。個人的にはブルネイの先生を通して人柄と国民性のすばらしさを知ってはいたが、教育上どのような問題をかかえ、それをどう解決し、教育のレベルを上げようとしているのか、ブルネイの将来のビジョン等その糸口をつかみたかった。しかし彼女の答えは短いものであった。「日本と同じように問題はあります。コンピューターでも問題が生じます。まして人間ですから。」というようのものであった。一瞬私は不満であった。が考えてみればこれ以上の名答はない。次に英国への留学について質問に答えていただいてから、二つのお願いを快く受けていただいて非常にうれしかった。一つは群馬県太田市ユネスコ協会とブルネイ国(まだユ協はないが)と児童画等の交換事業の承諾であり、もう一つは私が勤務する太田市立城東中学校とブルネイの学校との交流活動ができる道が開かれ、本校生徒及び太田市の児童生徒の国際理解教育推進上大きな前進と希望を持つことが出来、今後太田市の富士重工がすでに行っている乗用車スバルの輸出に加えて、ブルネイ国との文化交流活動を通して未永く友好関係を維持できるようになれば望外の喜びである。

さてその日の夜は私たちを初めから終わりまでお世話を下さった同窓会事務局長 Mr. Taib 家における歓迎夕食会及び交流会で、もう一人の同窓生に会う。青年の船で来日経験者ミス ズバイダ。すぐ近くにおられた私の Foster family のザリハさんが私の年齢を尋ねるので "I am fifteen." と私のメンタルエイジで答え、従ってザリハさんを "Mother" と呼ぶことにした。ザリハさんは私のことを "オトサン、オトサン" と呼び始める。年齢が見破られたかも知れない。おたがいに大笑いである。しかし親しみは倍加する。すぐ隣におられきりりとした清楚な女性ズバイダさんは実はザリハさんの妹であった。では彼女をなんと呼ぶか。"Mother" まではよかったが妹のズバイダさんでつかえてしまう。"You are my mother, too." "Oh No." またまたおかしなことになり大笑いとなる。親しみはますます深まる。

この家庭は10人兄弟姉妹であり、やがて14日、65歳のお父様と55歳のお母様、つまり私がブルネイの Father and Mother と呼んだ人、実に品のよい静かな篤信な夫婦に会うことになる。

その席でズバイダさんが中学生(12歳から15歳)の理科の先生であることがわかり、私が教えている同年令の子供たちの教育に燃える一女教師がこれからホームステイをする家族の中におられることを知り何とも言えない感謝に満たされるのである。

このように最初の晩からブルネイでの調査日程は楽しく消化されていった。12日、ハンディクラフト・トレーニングセンターの Head の方は私の名 "Masaru, Masaru" と言ってから皆に説明することが多かった。異国で自分の given name が親しく呼ばれ冷汗をかきながらもうれしい経験であった。ここは6年前ブルネイ・ダルサラーム国独立宣言と共に落成式

を行った記念すべきセンターで、非常に優秀な施設の中に手織の機織機が何台もあり女性の方が伝統的な織物作りを広げるためにこのセンターで研修と指導が行われている。私の少年時代村でみた同じ機械の光景を思いだし非常に懐かしかった。

サルタンの奨励とのことで、織物に限らずいわゆる地場産業（工芸）の製造を地道に行い心のこもった超一級の製品が作り出されていた。私たちがイデイン氏よりお土産にいただいたドラのような名入りのたてはいつまでも残る記念品であるがこのセンターでマスターされた職工さんの手によるものであり、この施設を国家の誇りの一つとして大切に育てている姿に学ぶべきヒントを得た。

福祉青年スポーツ局では両国の友好親善発展という観点から貴重な意見交換が行われたが、私はブルネイの経済基盤である石油と液化天然ガスの数十年後の枯渇とそれに対する将来への備えについて質問させていただいた。

資源のない日本は40年かかって教育と科学技術の向上、勤勉とある意味で犠牲の上に築き上げた富である。降って湧いたような資源のおかげであつという間に金持ちになった国の資源が終わった時に生きる子供たちへの保証をどうするかという質問である。期待した答えは日本のように教育技術の向上を図ること。であった。しかし以外にもその答えは「アラールの神が助けてくれます」というのであった。

この答えの信憑性は私には分からない。しかし全てはアラールの神の思召しである。という信仰の本音をオフィシャルな席で聞けたということは、それだけの信念も信仰もない私にとってそれは馬鹿らしいと笑ってられな一つの挑戦のことばであった。もしかするとイスラム教の5つの柱をブルネイの大部分の人、一人一人が日常生活の中でしっかりと忠実に守っている信仰実践に対しアラールの神が何等かの方法で答えてくれるのではないかと思えたのは、ホームステイでお世話になる家族の皆さんの信仰に触れ少しでもイスラム教をホームの中で直接学び取った時である。

この質問をしたおかげでブルネイ人の宗教性、国民性の一端が理解でき私にとって最も貴重な体験の一つとなった。イスラム教が人々の心の支えであり、アラールの神のもとに国家が一つとなっている。一つの祈りの力を知っている。ここにブルネイ人の人間形成の基礎があり人間教育の全てがあるといつてよい。特に幼少時から時間をきちんととって家庭あるいは学校施設でイスラム教育が行われているし全家長が模範を示していることには頭が下がる。彼らはイスラム教徒であることを誇りとしている。しかし決して狂信的ではない。むしろふだんは、そのたいせつな習慣を忘れてるようだ。ところがやるべきことはやるべき時間にきちんと行っている。

私が一番感動を覚えたのもそのことである。一神教の目に見えない神に対する信頼とそのきびしさにふれたことである。しかし考えてみれば幸せな国である。そういう大切な時間を大切なもののために使えるよう保証されているからである。

今やブルネイは世界有数の金持ちの国である。彼らに言わせればアラームの神の思召しである。だから経済大国というよりやはり宗教大国というべきであろう。

“What is Japan? What is Japan?”ブルネイで何回も自問した自国への疑問である。日本は経済大国と言われているが、日本の発展は経済中心、利益の追求に向かって国民が一つになってきたことの何物でもなかったのではないか？

もしこの二つの金持ちの国からお金がなくなってしまったとき一体何が残るのか。日本には優秀な技術とその教育力生産力。しかしブルネイには彼らの心の幸福を支えている宗教、イスラム教が残るであろう。

次にブルネイ大学では教育制度その他まとめて教育について講義があった。ブルネイでは教育にかかる費用は授業料、食費その他雑費等一切無料である。ただ教育雑誌(年間1200円位)やワークブック購入に若干料かかるのみである。5歳の就学前教育から教育は行われ、気候風土に合った学校運営がなされているように思いが基本的には日本の制度と大差はなさそうである。

私は医師の養成機関について質問したが特に現在はまだ医学部はなく外国人医師に頼ることが多いようである。ブルネイは世界中で5番目位に長寿国である。病気の実態と長生きの秘訣を聞いてみたがDirector 個人の答えとして、よく笑っていること、生活が楽なこと、ストレスがないこと。うらやましい答えであった。ちなみにブルネイでは医療費は無料である。もちろん税金はなしである。電話も基本料僅か国内ならどこへ何回かけても無料である。これも長寿を裏付けている一部である。

次のヒストリーセンターではサルタンの系図、墓石のレプリカ等見学し、その後熱のこもった館長さんのイスラム教のお話にすいこまれる。自信たっぷりに語られる。マホメットが最後の予言者であり、天使の出現を得てコーランを授かったこと、天国と地獄の話にも及んだ。

ブルネイ工科専門学校を通して知るところによるとアマチュア無線人口は少ないようであるが、やがて日本の私の部屋でブルネイの人と無線で交信できるようになると感じた。

その日の夜は日本大使館招待の夕食会。久しぶりに日本的な食事をいただいて楽しい交流の一時を過ごした。この席で私の隣の30歳のブルネイ男性は公務員で1ヶ月のサラリーはブルネイドルで1500\$ (1\$77円位)、タイピストの奥さんは700\$でインドネシアの女性を1ヶ月250\$でメイドとして雇っているという話など快く何でも教えてくれた。政府から借金して買った車と家のローンがあり返済もしているということである。

14日、シナウト農業研修センターまでホテルから約30分、車の両サイドにブルネイの田舎の景色を十分に楽しむ。このセンターでもmade in Japanの農機に出会う。主食である米はほとんどタイ国等から輸入している。この研修所を通して今6%位の生産を有事に備えて先ず30%の国内増産を図るべく悪質な土地の改善を中心に研究をしている。野菜作りも

困難であるがグリーンハウスの活用により増産を図る試みがなされているその努力に脱帽した。次にマックファームは国内に於て卵の生産(98%可)鳥肉の生産のように、オーストラリアからの輸入に頼っていたビーフを満たすために肉牛の生産方法を開発研究し数少ない農家に還元しようとする角度から努力をしている。特に雨の多い所での野菜作りは害虫の発生等多く困難な上、水蒸気によって太陽光線が遮られ80,000ルクス位になりトマトの栽培では10万ルクスを越え16万ルクス以上必要で、紫外線が多い割に光が弱く、グリーンハウスによる水耕法の研究がなされていた。

このところでは数多くの珍しい熱帯の果樹をまるごと観賞したり実際に食べる機会を与えられ果物は豊かであることをうらやましく感じた。

さてプログラムも大きな山を向かえた。いよいよ待望のホームステイである。私がホームステイした家は鉄筋コンクリート作りの1989年9月に完成したばかりの極めて新しい二階家である。まず通されたところが応接間でいわば王宮の一広間である。その一帯には親類が集まって住んでいる。いわば親戚コミュニティである。私の寝室のすぐ下には比較的古い高床式の家がバナナや椰子の木の生い茂る中にあり、何とも言えない熱帯の雰囲気を楽しむことができた。椰子の木の生い茂る向こうには熱帯の空が広がっている。雲も熱帯らしく迫力がある。12月は雨期に入っているが残念ながらスクールを体験しなかった。

御両親と10人兄弟姉妹、孫が2人の家庭で完全に家族の一員として歓迎された。食事は私のほうから率先して手(右手)で食べ始めた。そうすると家族が一斉に手で食べ始めたときは、本当に手で食べて良かったと思った。ホームステイ期間中ズバイダさんよりイスラム教について、彼女が勤める学校について知る機会となる。

日本のブルネイ大使館に勤める長男の方と国際電話。水上部落の見学を薦められた。彼女ら3人と共にオープンマーケット、水上部落、王宮、モスク、ズバイダさんの学校、新しいスタジアム等巡る。別れるときにこの家庭から“Adoption Certificate”なるものをいただく。半分ユーモアであろうが、私にとって最高のおみやげでその写真とすばらしい文章入りの額は宝として大切にしたい。

さてこの地域を何回か車で往復(この国は鉄道は一つもない)することになるが、道路のところどころしばらく行くとハンプといって盛り上がりが作ってある。車はそこでスピードを落とすことになる。以前交通事故で子供が死亡したとのことでその対策である。ここにもブルネイ人の人間を大切に作る心が形と成っている。

まるで映画の主人公になったようなホームステイが終わって、次に訪れた林業研究所ではプロジェクト主任古越氏より森林、ジャングル保護と研究について現地で直接感動的なお話を聞くことができた。

17日はサレー氏の妹さんの結婚式に出席。私には前の晩の化粧の儀式より出席を求められていたが日程や身体の都合で欠席。そのかわり17日は日本の調査メンバーも招待され、

又とない機会なので約45分ボートに乗って両サイドに密林を楽しみながらサレー氏の故郷に向かった。私はブルネイの民族衣装に着替えサブレ氏の案内で式場へ到着すると特設のテントの中には男女が別々に約500人ほど座っていた。親類、近所の人たちであろう。やがて花婿と花嫁がサレー氏のお父さんの先導で入場し、一人一人に握手をしながら祝金袋を受け取る。すぐ後からお返しの記念品が配られる。庭で7回廻り美しく豪華に装飾された2階の二人の席に着席し皆の祝福を受ける。

ブルネイでのアフターケア調査に参加させていただき、なお記録できなかった多くの人に出会い数々の思い出を残し今夢のように過ぎた10日間。そしてそのすこし前私の家で二人のブルネイの先生と過ごした二日間。ただそれだけの日数の中でどれほどおおくの感動と友情が生まれ、今後のお付合まで約束しあって終了できたことは一体何であったのか？

その答えを、日本が石油と天然ガスを買ひブルネイは日本から乗用車と電化製品を買っているという二つの金持ちの国の利害関係の上に成り立っている。と答えた人がいるとしたら、私はその人に部分的には共鳴するところもあるが、それでは私は本当に納得しない。私のような無名な貧しい日本人教員が足で歩いて感じたことこそ真実に近いものであると信じている。私が結論的に感じたこと、それは利害を越えた心情であり友情であり、正に21世紀を生きる若者や子供たちが互いに生きていくことができるように愛のネットワークを今、私たちの責任において築いておかなければならないという課題の上に成り立っているものであると感じているのである。私たちは21世紀への共通の不安と共通の希望をもっている。天は自ら助けるものを助けるという。これからおたがい一致協力し心には心を愛には愛をもってこたえありならば宗教や生活習慣を越えて天は必ず道を開いてくれるものと確信している。

最後に関係各位に心から感謝申し上げます。

7. 提 言

1) 昨年のレポートの中でも述べられていたが、アフターケア調査プログラムの趣旨がよく理解出来るようなリーフレットの制作を求めたい。日本人参加者にとってもJIOAからの書類だけでは目的が充分把握できない。訪問国の受け入れ担当者でさえ、当プログラムの趣旨を充分理解出来ていないというのが現実ではないだろうか(ブルネイだけかも知れないが)。訪問先でも、私達が何故そこを訪問しているのかがあまり理解されていないという印象を受けた。当調査プログラムの趣旨を説明したリーフレットがあれば、予め担当者から各訪問先に対して受け入れの対応について説明が容易であり、訪問の成果がより期待できると思われる。以上の理由により日本語・英語の趣旨説明リーフレットの制作を要望したい。

2) 上記1)とも関連するが、当調査プログラムの目的の明確化をお願いしたい。

中央実施協力団体の実務担当者と、地方受け入れ協力者(必ずしも「21世紀のための友

情計画」に今後も継続して関わらない)では、訪問の主目的が微妙に違う。地方参加者の再交流が主眼であり、実務担当者は調査を主に考えて参加している。今回のプログラムのように、関係省庁への表敬、訪問を主にした構成だと、参加青年との再交流の時間が殆ど取れない。やむを得ず休憩時間や夜の時間を利用することになり、参加者にとって身体的に負担となる場合がある。また、調査のための打合せや準備のためかなりの時間を割かねばならず、しかも訪問先によってはその準備が徒勞に終わることも少なくない(理由は上記に述べた通り)。再交流も調査も中途半端になってしまうのではないだろうか。

アフターケア調査プログラムの目的を絞り込む、あるいは現地で再交流主体のグループと調査主体のグループに分かれて行動するなど、地方参加者が充分再交流できるように対応を考えて頂きたい。

3) 7陣、8陣受け入れ団体に関してだが、プログラム終了からアフターケア調査出発までに、もう少し時間的余裕を持ったスケジュールを考えて頂きたい。今日の日程では、受け入れ後の十分な反省もせず、また訪問のために十分な準備もできないまま出発しなければならない。次年度の準備に支障がない範囲で、日程をずらす事を検討願いたい。

4) 参加費用の自己負担をできるだけなくす方向で検討願いたい。ブルネイに関して言えば、実際には現地滞在費用は殆ど掛からなかったが、参加者募集の段階ではどの程度の自己負担が必要か分からない。経済的理由で参加を見合わせる人も多く、広く参加者を募る意味からも、自己負担をなくす、あるいは自己負担限度額を定めて超過部分はJICAが負担するなどの方法を検討願いたい。

今回、参加者に公立中学・大学の教員がいたのだが、参加に当たって職免扱いが適応されなかった。この点に関しても配慮をお願いしたい。

インドネシア

平成元年12月6日～15日

中央青少年団体連絡協議会

1. 調査チーム派遣概要

1-1 調査チームの構成

	氏名	年齢/性別	現住所/所属先
チームリーダー	西 広 咲 子	48 女	千葉県佐倉市中志津2-2-22 (財)日本青年協会講師 中央青少年団体連絡協議会、プログラム コーディネーター
メンバー	長谷川 章 悦	40 男	青森県南津軽郡浪岡町北中野字天王 101-2 青森県青少年団体連絡協議会 地方プログラム実施団体
メンバー	吉 野 喜 信	36 男	東京都練馬区旭町1-33-22-607 (財)日本武道館 共通プログラム担当者
メンバー	坂 本 進	33 男	岩手県盛岡市本町通1-10-22 ファインパフォーマンス本町201 岩手県総務部総務学事課国際交流室 地方公共団体窓口実務担当者
メンバー	石 川 優 子	40 女	千葉県鎌ヶ谷市道野辺968 ガールスカウト日本連盟、学院講師 セミナー参加者
メンバー	佐 藤 早 苗	27 女	山形県指山郡朝日町大字和合1005 日本青年団協議会、地方公務員 ホームステイ受け入れ家庭

1-2 調査日程

1-3 主要面談者

月日 曜日	時刻	日 程	主 要 面 談 者 (宿 泊 等)
12月 6日 (水)	7:00	京成上野発スカイライナー	JICA. MS.TUTI KAPPIJA MS. ELIANA 出迎え
	8:00	京成成田空港到着	
東京(晴)	8:30	成田空港集合	
ジャカルタ	11:00	成田発 GA873 便	
(晴)	16:20	ジャカルタ、スカルノ・ハッタ 空港着	

月日 曜日	時刻	日 程	主 要 面 談 者 (宿 泊 等)
12月 7日 (木) 未明、夜 (雨) 日中(晴)	18:10 19:00~ 21:30 9:10~ 10:10 10:40~ 11:05 11:30~ 12:30 12:50~ 14:00 15:15~ 17:10 17:30	ジャカルタ市内着 アンチョール、芸術広場、見学 JICAジャカルタ事務所訪問 ジャカルタ特別市文化局 ジャカルタ芸術協会 ジャカルタ芸術センター(TIM) 日本大使館表敬 KNPI(国家青年委員会) 訪問 ホテル帰着 自主研修、打合せ等	ブレンデント・ホテル泊 北野康夫所長、松岡和久次長 に面談 フセイン・ジャカルタ芸術劇 場支配人 アミ・プリヨノ委員長 大橋事務官と面談 NERSON EDI 国際協力局委員、他 ブレンデント・ホテル泊
12月 8日 (金) (曇時々晴) 夕方(雨)	10:00~ 12:00 12:10~ 13:50 14:10~ 14:50 20:20 20:20~ 20:50 21:00	青年スポーツ省 青年招へい事業同窓会、 KAPPIJA-21 との懇談会 KAPPIJA-21 メンバーとの 昼食会 アクバール・タンジュン青年ス ポーツ大臣表敬 ジャカルタ発、ブンチャック特 経由 バンドン、青年会館GGM着 バンドン KAPPIJA-21 メンバーと打合せ ホームステイ	MR. YAN HIC SAS 会長 他 16名 同 上 アクバール・タンジュン大臣 スナルヨ第一補佐官、他 WAWAN 会長、他 民 泊
12月 9日 (土) (曇) 午後(雨)	9:30~ 10:30 10:40~ 11:45 13:00~ 14:00	スティアブディ小学校訪問 バンドン教育大学視察 (図書館、民族芸能センター、 LL教室) アブドル・ハシド学長第一補佐 官を表敬	アブドル ハシド学長補佐

月日 曜日	時刻	日 程	主要面談者 (宿泊等)
	14:10~ 16:20~ 17:50 20:20~ 21:45 22:00	AAS. SYAEFUDDIN バンド ン教育大学教授宅にて、バンド ンKAPPIJA-21 メンバーと 共に昼食会 サウン・アングルン ババク、 ウジョにマスンダ地方芸能鑑賞 スンダ族結婚被露宴見学 ホームステイ	民 泊
12月10日 (日) (晴)	8:50~ 14:10 16:30 18:50 19:40~ 21:00	バンドン発、ポゴール経由 スヤルノ・ハッタ空港着 ジャカルタ発GA152 メダン・ポロニア空港着 ホテル着、同窓会有志との懇談	メダン KAPPIJA-21 メンバー6名出迎え ティアラホテル泊
12月11日 (月) (曇)	9:00~ 10:00 10:30~ 12:00 12:10~ 12:30 13:00~ 13:40 14:10~ 15:45 16:10~ 17:10 19:10~ 20:30 20:30~ 22:00 22:30	在メダン日本総領事館、小嶋総 領事表敬 WASPADA新聞社訪問 デリ候国宮殿見学 回教寺院見学 総領事公邸訪問 工業省工業化学技術研修所視察 INALUM メダン事務所訪問、 アサンプロジェクト映画鑑賞 レストラン JENAR 北スマトラ KAPPIJA-21 メンバー他、交歓会 市内見学(野外マーケット) ホテル着	小嶋総領事 小倉副領事 MS. ANI IDRIS 社長、他 MR. SUGEN MR. ZAIN MR. TOENDANG 小倉副領事夫妻、MS. ANI IDRIS 他 終日 KAPPIJA-21 メンバー6名同行 ティアラホテル泊

月日 曜日	時刻	日 程	主要面談者 (宿泊等)
12月12日 (火) (曇)	8:20	メダン発	INALUM社
		バーム油、ゴムのプランテーション、北スマトラサディ郡庁舎 見学	MR. ZAINI 同行
	10:55~	クアラ・タンジュン着	
	12:00	INALUM アルミ精練工場視察 アサハプロジェクトの概要説明等	加藤所長
	12:30~	訪日経験従業員との昼食懇談会	
	13:20		
	13:30~	精練工場、専用埠頭視察	MR. SHAERANI 工場長
	14:50		
	15:10~	INALUM ニュータウン視察、	
	15:30	体育館、コミュニティセンター 病院等の視察	
15:35	クアラタンジュン、INALUM ニュータウン出発		
	ココアのプランテーション見学		
17:50	パラパット着 タバヌリ地方の民謡を聴く	パラパットホテル泊	
12月13日 (水) (曇)	8:20	パラパット発	
	9:50~	パリトハン着	鳥井所長
	12:00	シグラグラダム、タンガダム、 シグラグラ発電所視察	
	12:00~	昼食懇談会	
	13:30~	パリトハン出発 ブマタン・シアンタール、トゥ ピン・ディング経由	
	19:00	メダン着	
	20:00	ホテル着	KAPPIJAメンバー待期、 懇談 ティアラ・ホテル泊

月日 曜日	時刻	日 程	主要面談者 (宿泊等)
12月14日 (木) (曇)	9:15 9:20 10:40 12:45 13:10 14:20 15:00~ 18:00 23:30	ホテル発 メダン、ポロニア空港着 ポロニア空港発 GA151 ジャカルタ・スカルノ・ハッタ 空港着 スカルノ・ハッタ空港発 JICA ジャカルタ事務所、 報告 ジャカルタ市内見学 スカルノ・ハッタ空港発 GA872	北野所長、松岡次長、友部氏 機内泊
12月15日 (金)	7:55	成田空港着	

2. 現地活動報告

2-1 表敬、訪問先に於ける意見交換内容

(1) JICA ジャカルタ事務所 (12月7日 木)

インドネシア情勢、青年招へい事業等の状況について説明を受けた。

インドネシアは約300種族があり、宗教も多様である。統一言語として「バハサ・インドネシア」を制定、初等教育から言語教育に力を入れているが、教育施設への投資は遅れている。

インドネシアの年間国家予算は3兆円しかなく、これで1億7千万人の人口を抱えている。歳入の内、3分の1が石油収入(昔は2分の1)、3分の1が税金、3分の1が外国からの援助で、内半分が日本からのものである。日本の援助の内90%が借款、5%が無償資金協力、5%が技術協力であるが、技術協力の内10%が研修関係、20%が青年招へいとなっている。円借款は、港湾、電気、灌漑、医療保健、上水道、住宅、人材養成等に使われている。日本に行く研修生は平均400人、青年招へいは年間150人で、日本からの専門家派遣は、一年以上の長期が200人、短期が200人である。プロジェクト技術協力は現在は20件、円借款による基礎調査は25件程で、1989年度からは青年海外協力隊が入り、現在13人が派遣されている。

青年招へい事業は6年目を迎え、帰国青年が同窓会に加入し、活動も熱心に行われて

いるが、財源の問題、会費の負担が課題になっている。昔の留学生も交えた、日伊フレンドシップ、アソシエーション等も日伊理解のセミナー等を開催し活動は活発だが、会合の飛行機代、セミナー参加、開催費等はJICAで負担している。日本企業を会員にして法人会費をとったり、何かあれば更に寄付金を募っているのが実情である。

日本の対インドネシア援助、技術協力の現状について理解を深める事が出来た。

(2) ジャカルタ市芸術局、ジャカルタ芸術協会、ジャカルタ芸術文化センター(TIM)
(12月7日)

ジャカルタ市の芸術活動の拠点は市内に2ヶ所あり、TIMジャカルタ芸術文化センター、ジャカルタ芸術劇場である。TIMはジャカルタ芸術文化活動の総合的な役割を担っており、若人から老人迄の芸術愛好家が多く訪れ、入場料は5,000ルピアと安価である。芸術劇場は、良質のものを上演する事としており、観客は芸術に関心があるかどうかは別にして、金持ちが多く、入場料は15,000ルピアから最高75,000ルピアである。建物は1821年に建てられ、1879年に改築されたものであるが、日本の技術もステージ、照明、大道具等に活かされている。

TIMの敷地は7.5haであり、プラネタリウムも備えている。ジャカルタ特別市の下部組織として行政府の役割も果たしている。予算は市から出ているが、芸術に対する社会的関心の要望の高まりとともに財源の問題が生じている。市、芸術家、企業の三者で第三セクターを作り運営する計画もある。現在市からは演劇等に対して、2億ルピアの予算が計上されているが、この予算は20年来変わっておらず、芸術への要望が強い事に比べて、優先度が低い。

ジャカルタ芸術協会はジャカルタ在住芸術家24人と市職員1人の25人が役員となっており任期は3年、2期又は3期まで務める事が出来る役員構成は、文学、音楽、演劇、彫刻、絵画、映画の6分野から各々4名、計24名で構成され、文学委員会等、各委員会を構成し更に下部組織を構成、それらを通して日常活動を行っている。事務局7名、永年任期の最高権威者から成る芸術アカデミーがあり、ここが24人を指名、ジャカルタ特別市が任命する。協会は1962年に設立され、地方での芸術文化活動を刺激している。インドネシアでは衣食住の問題が整備されているとは言えず、芸術への優先度は低いが、芸術文化は精神的な教育の道具として有効であると考えられているので、市の財源負担の他、民間企業、芸術愛好家からの寄付もある。

インドネシアでは、絵画、彫刻、音楽、舞踊など、目で見、耳で聴く文化は非常に良く発達しており、社会的にも認められ、世界的にも注目されているが、文学の様な、読む文化は今だに未発達な状態で、社会的関心も低く、理解を得るには長い時間を要すると思われる。TIMの劇場用装置は日本の援助によるものであり、芸術文化活動の影の力になっている。会見後、画家ムスティカ、ヌナン両氏の絵画展を見学、芸術アカデミ

一の学生の授業を観る。画家として社会的に認められるのは具象、抽象を問わず10年余の才月を要するという事であった。

芸術文化は人種やイデオロギー等に関係なく直接交流の出来る分野であり、日本とインドネシアとの交流も今後はこの分野も含め進めてゆく必要を改めて感じた。1990年1月10日には東京にアセアン文化センターが開設され、これを記念してインドネシアの現代演劇公演があると聞くが、非常に楽しみである。

(3) 在ジャカルタ日本大使館

青年招へい事業では毎年150人のインドネシア青年が訪日、相互交流を深め、21世紀に向けての信頼、友好関係の掛け橋となっている。

訪日青年の同窓会(KAPPIJA)や元留学生の日伊友好期間PERSADAも設立されている。又日本側からも「若人の翼」のような県レベルでの国際交流使節団が訪「イ」するようになって来ている。

毎年100人の文部省奨学生が日本に留学し、技術援助、協力も活発に行われているが、日本からのインドネシアへの留学生はまだ少なく、インドネシアに対する日本人の関心を喚起する工夫が必要である。日本人は何かきっかけがないとインドネシアについて学ぼうとする気にならないらしい。

インドネシアの日本に対する関心は、専ら経済力についてであり、戦後日本で経済発展をなした原動力は何なのかといった質問がよく出る。又学生の相談の中には、お金がないが、どうにかして日本に留学する道はないかななどの質問が多く、昔日本人が欧米に憧れている様だ。

日本とインドネシアの交流形態は色々であるが、単にきれいな事の交流に終っており、しかもインドネシアから日本への派遣が殆んどである。問題点は様々出て来ているが、長い目で見ると必要があるだろう。例えば日本のホームステイ受入者が、訪「イ」する様な機会も必要であると思う。国ではインドネシア芸能、音楽等を日本に招へいし、日本の社会の理解を高める事にしている。1990年1月に東京の渋谷にアセアン文化センターが開館し、アセアンの文化を紹介する。

青年招へい事業も1989年から第二フェーズに入り、今後継続する可能性もある。今年から専門分野の受け入れもする事になった。日本では地域レベルでの国際交流が盛んになりつつあるが、地方のプログラムは自由にやれるようにしたいと思うし、又個人レベルでの交流が最も重要であると思う。

現場の声を外務省、JICA等につけてほしい。セクションによっては話しても聞く耳もたずの所もあるが、外務省でも相互交流計画に力を入れているので、民間がやりやすい様な体制づくりを国は望んでいる。現場の方が直接的で有用な事を知っており、力にもなっている。

大使館の直接担当者としての経験から、現地での本音を聞く事が出来、有意義であった。

(4) アクバル・タンジュン青年スポーツ大臣表敬

(スナルヨ大臣第一補佐官同席)

大臣から日・イ友好協力関係の発展等についてのお言葉があり、日本側を代表して、長谷川氏がお礼の言葉をのべ、記念品の交換、写真撮影を行った。

(5) バンドン青年会館(12月8日)

バンドン KAPPIJA-21 のメンバーと対面、自己紹介、記念品交換等を行う。ホームステイの方をお願いしたが、ジャカルタ・バンドンの行程が雨の為、遅くなったにもかかわらず熱心な対応に感謝の念を禁じ得ない。

(6) スティアブディ小学校訪問

フティアブディ小学校児童数435人(男子4割、女子6割)で11クラスの編成、職員28人(男5人、女23人)。

1968年バンドン教育大学附属小学校として創立、1972年中央政府(教育文化省)の実験校に、1985年西ジャワ州政府教育部に移管。

小学校は6年制であるが、能力に応じての進級を行うため、年齢による自動的な進級は行われない。

授業時間数は、1年～2年生は1週35時間、毎日7:00～10:15の5時限授業。

3年～6年生は、1週42時間、毎日7:00～12:10の7時限授業である。

公立校であるが授業料は親の負担、必須教科書は文部省負担、補助教材は親の負担となる。

学期は3学期制(8～10月、11～2月、3～6月)6～7月学期末休暇となる。

カリキュラムは教育文化省の定める統一カリキュラムで運営される。

小学校6年間は義務教育が原則で、健康な子供であれば、全て小学校に入学する。貧しい家庭に対しては援助制度がある。公立の中学校への進学率は85～90%で、残りは私立中学へ進学する。

新任教師の教育実習期間は3～6ヶ月で、校長が良いと認める迄続ける。

学校内の教室見学、各教室で生徒達から“こんにちは”の挨拶を受ける。見学後、児童が、日本の歌、スダ地方の踊りを披露し、団員も共に興じる、素朴だが暖かい歓迎であった。日本の歌は、バンドン日本人小学校との交流が続けられているとの事で、その成果だと云う事であった。

インドネシアの教育に対する意気込みは強く、親も子供も教育に対する関心は強い。

民族楽器による民族音楽の学習は伝統文化の継承に有効な方法である。

子供達の表情は日本もインドネシアも変わらない。

中学校、高等学校は期末試験中であるため試験風景を見学、教室数が足りず、各教室共過密ではあるが、社会の教育に対する関心が年々高まり学校施設の充実が追いつかないのが現状であるとの事であった。

(7) バンドン教育大学大学図書館、民族芸能センター、LL教室

図書館の蔵書数12万冊、内75%が英語、20%がインドネシア語、5%が日本語を含むその他の外国語である。1万2000人の学生を相手に、朝8:00~17:30迄開館しており、貸し出しは1人2冊2週間迄である。職員数は50人であり、学長直属の施設で第一学長補佐が最高責任者となる。事務、運営、供給、サービス、レファレンスの5つの組織から成り、教育調整、社会奉仕の役割を果たしている。蔵書数12万冊は必要な冊数の半数にも達していないのが現状で、建物自体も1350㎡と狭く、せめてこの10倍(10,000㎡)位ほしい。利用者は1日1000~1500人である。ビデオ、テープ等の視聴覚教材は数える程度で、コンピューター管理システムを導入したばかりである。

インドネシアでは公共図書館数は限られており、その利用も所属期間に関係する者と限られている。読む文化が普及するには長い年月が必要であると思われる。

民族芸能教育科では、スダ地方の民族芸能、カチャビ、ガメラン等の演奏練習を見学した。バンドン教育大学のカチャビ演奏は全国的にも有名で、オーストラリア、ヨーロッパ各国への演奏旅行を行っているが、残念ながら日本へはまだ行く機会がないとの事であった。

スダ民謡は日本、特に沖縄民謡に旋律が似ており、親しみ易い。

LL教室の規模は二教室程度であり、機器は全て日本製であった。日本語のテープを聞く。

(8) バンドン教育大学、ハシド教育大学長第一補佐官表敬

教育大学長は、急死した教授の告別式に出席しているため、急遽、国際関係担当の第一学長補佐を表敬。

大学では、オーストラリア、マレーシア、タイ、日本の留学生を受け入れており、インドネシア国内の学生は、全国から集まっている。又日本語科もあり、学生の日本語学習意欲は高い。インドネシアにも奨学金制度があり、財団形式をとり支給している。国立大学の授業料は安く、教育環境も整っているため志願者も多く、総志願者中10%程度が入学できるだけだ。学生にアルバイトの習慣はなく、全ての費用は親の負担である。

インドネシアでは、日本のテレビ番組「おしん」の人气が社会各層におよんでおり、日本が現在の様な発展をとげた過程を知る上で大変役立っている。欧米のものは、あまりにインドネシアの現状とかけ離れており、参考にはなり得ない。「おしん」のステロタイプが現在のインドネシアの姿を写し出している。

大学の施設は日本の方が立派だが、学生の学ぼうという姿勢はインドネシアの方が上のようにだ。子供が自発的に学ぼうという事は、親が子供の教育について、どう方向づけるかにかかっている。家族の絆が社会の重要な要素となっている。

日本の文化は伝統を失わずに、現代に生きてゆける資質を持ったものと考えている。インドネシアの文化について知りたければ、短期の受け入れも大学としても提供する事は可能である。

ハンド補佐の質問に対して、「おしん」の様な精神は現在の日本では武道の世界にしか残っていない、親子の絆も薄くなっている。日本の社会、経済のリーダーには武道をやってきた者も多い。日本の一端を理解するには、武道の事を学ぶ事も一方法であると思う。又日本は経済成長を遂げたが、半面、内面的なものが失われつつあるので、表面的なものをもし真似するとすれば失敗につながるので注意していただきたい。良い所も悪い所も学んでいただきたい。と答えた。和気合々として、時間延長の表敬訪問であった。

東南アジアの「おしん」人気に驚かされる事もしばしば。経済発達を遂げ様とする中で、インドネシアでも古い伝統的なものが、新しい秩序によって失われてゆく様な危惧を抱いた。

(9) サウン・アングルン バダスカ

西ジャワ州、スンダ地方の伝統芸能「ワヤングレック」「アングロン演奏」「タリ・トベン」観賞。

スンダ民族の結婚披露宴の見学。

(10) 在メダン日本総領事館、小嶋総領事表敬

メダンには1ヶ月に赴任、今回でインドネシアは3回目である。第一回目は1963年～1969年にジャカルタに赴任、マレーシアとの紛争や、スカルノ政権の崩壊、国連からの脱退等ドラマティックな時代であった。2回目は同じく、ジャカルタであったが、マラリ事件など、反日暴動の盛んな時期であった。そして今回メダンに着任したが、この間にインドネシアは着実に良くなって来ている。日本人の目から見れば、足りない所や、批判したくなる様な所が多々あると思うが、一つの国を知るには、時々現象をとらえるだけではなく、その国の歩んできた軌跡をたどってゆく事が必要であり、インドネシアの国民は立派になったと誇りに思っているにちがいない。その一例が食糧の自給自足である。スカルノの時代は毎年1億ドル以上の国家予算を計上し、米の輸入をしなければならなかった。当時はインドネシアが米の自給を達成する事など不可能であると考えられていたが、数年前に完全に自給できるようになり、これからは輸出しようとする迄になった。

インドネシアも、日本と同様、汚職はあるが、現在は汚職に対する政府、国民の取り組み方が格段に良くなって来ている。25年程前、税関は汚職の権化であると恐れられ

ていた頃に比べ、現在の変わり様は隔世の感がする。

メダンに来てすぐ、日本人が事件に巻き込まれそうになった所（インドネシアの官憲が関係していたらしいが）、インドネシア政府内の自浄作用が働き、日本の介入を待たずに解決にいった。この様な事は、かつて起った事がなかった事なのである。

インドネシアでも東欧の情勢に関心を抱いており、先進国の援助が、アセアンから東欧に向うのではないかと心配をしている。アメリカやEC諸国のアジアへの関心が低くなっていくのは、仕方がないが、日本がアセアンへの関心を低くする事はない。

インドネシアの青年の国家意識が高いのは多民族国家であるので統一していこうという意識が常に働くからであり、インドネシアがもっと国として豊かで強力になりさえすれば、今度は「国の為」ばかりではなく「全人類」のためというような、もっと広範な意識が生まれて来るだろう。環境問題が特にそうであり、一国で解決出来るものではない。今は日本の青年が、アメリカの青年がと云って区別出来る時代ではないと思われる。日本の青年はこうだと全体像を明確に言えない時代である。この現象はどここの国でもそうである。インドネシアでは多様性が尊重され、インドネシアとは何か、国の理想は何かと聞かれても、簡単に答えられる問題ではない。

インドネシアは現在、スカルノ時代の円借款の返済期に入っているのだが、政府は間違いなく返済する事を表明、事実、返済期日にはきちつ、きちつと返済されているのも事実だ。ブラジルやアフリカの事情とは異なっているので同一視するのだけはさけてほしいとの事であった。

(11) WASPADA新聞社

ワスパダ新聞社、アン・イドルス社主と面談。

ワスパダ新聞社は1947年1月1日に設立、現在はインドネシア語の新聞を1月10万部（朝刊のみ）を発行している。北スマトラで最も古く、最も大きな新聞社である。新聞発行に当たっては公平な視点から見る事を主義とし、過去に於いて、社会闘争の影響を受け5回発禁処分を受けている。北スマトラ社会に関する報道では高い評価を受けており、中央政府もWASPADAの報道に関心をもっている。日本政府からの招待を受けた事があり、戦争賠償について話し合った。その後現在迄、数人の記者が日本の招待を受け、日本への理解を深めて来た。社のポリシーは独立の精神であって、政府の考えを国民に伝え、国民の意見を政府に伝えるスポークスマンの役割を果たしている。スマトラには政党の新聞もあるが、ワスパダは自主独立の精神で経営している。

インドネシアの今後の方向は自主独立の発展を目指しているが、外資の導入も図っている。政府の施策が社会の利益に反する時、例えば、外資が国の利益、中小企業の生存を脅やかす様な時は政府に抗議することもある。

WASPADAは北スマトラの観光事業にも力を注ぎ、先日も北スマトラ新聞協会は石油会社をスポンサーとして、観光に関するセミナーを実施した。一つの工場が出来るとも、観光振興をする事により、それに関連する産業も伸びる事が出来、地域社会に貢献出来る。日本人の美意識を観光開発に生かしたい。又衛生に関する意識もいまだに低く、保健衛生について、日本人の知恵を貸してほしい。

アサバン・プロジェクトの影響かどうかわからないが、トバ湖の水位が下がっているという問題もある。開発か自然保護かは、北スマトラの人々は土地への執着が強いので大きく衝突する。開発に当っては、環境庁の許可が必要とされている。

戦争体験が日本及び日本人に対する考え方を改めてかどうかの質問に対して、社中は、戦争体験者は年をとり、戦争を知らない世代が人口の大部分を占める様になった、過去の苦い経験も、心の傷も、日伊の誤りのない友好関係がいやしていく。

インフレの社会的影響は、政府の施策であるのでコメント出来ないが、観光は民間レベルで国の振興に役立つものであるので推進している。日本も今や金持ちの国である、是非スマトラの観光開発に力を貸してもらいたい。

青年招へい事業について、人材育成、国際的な理解を深めてゆくに大変意義のあるプログラムであり、今迄知らずに過していた事は残念な事であった。北スマトラの青年を啓蒙する意味においても、是非全様を知り、善く報道をしてゆきたい。その為にも若く優秀な記者を送れないものかとの要望があった。

(12) 工業省、工業化学技術研修所

1983年、インドネシア工業省によって建てられた研修所であり、工業化学教育、工場メカニズムのプログラムを通じて、技術者、班長、主任、現場監督、熟練工の教育養成を行っている。創立以来養成した技術者300人、入学資格は高校或いは技術学校卒の18才~20才の者で、試験科目は、化学、数学、物理、英語である。毎年500人が受験し、100人が合格するので合格率は20%程度である。3年6学期の授業は40%が理論、60%が実習で、朝8時から夜6時迄開講している。研修後報告書を作成し、国家試験を受ける(合格率90%)。今年度の卒業生125人は化学、技術係会社(ゴム、パーム油等)に就職している。

日本の援助も建物について20億円、施設等を含めると30億円になり、専門家派遣、研修生派遣も行われている。既に2回技術援助の延長、1990年には保守関係の専門家派遣がある。8haの敷地には、学校施設、職員住宅、学生寮、食堂、ミニ工場等を有し、規模は東南亜最大である。卒業生の資格を大卒と同様程度の資格にしたいが、それには建物、施設が不足しているので日本の援助を望みたい。授業は一年二学期制で26万ルピア、経費は電気代が毎日350万ルピアかかっている。概要説明後校内視察、同行の同窓会メンバーの関心は高く、様々な質問が出た。

(13) インドネシア・アサハン・アルミニウム株式会社 (INALUM)

INALUM は 1975 年、インドネシア政府と日本企業の間で設立された合弁会社であり、本社はジャカルタ、支社はメダン、精練工場はクアラ・タンジュン、発電所はトバ湖から流れるアサハン河にあり、東京には日本側総括機関がおかれている。まずメダン支社で、プロジェクトの完成に到る経過を描いた映画を見る。

(13-1) INALUM アルミ精練工場

JICA には防疫、灌漑、技術訓練等で協力をいただいている。

アサハンプロジェクトは発電所、アルミ精練所の二つから成り、戦前はオランダが着工し戦争で中止、戦後はソ連が計画したが政治的理由により中止、1975 年日・イ両国で合意した。1982 年第一期工事が完了、1984 年には全工事が完成している。精練工場の敷地面積は 200 ha、ニュータウンも 200 ha あり、道路、港湾、住宅等公共施設も整備している。年間 225,000 トンのアルミ生産を行っており、これはアジアで第一位、世界でも 10 指に入る。

アルミの生産工程は、桂素とアルミの酸化物を等分に含んでいるボーキサイトから、アルミ酸化鉄アルミナを抽出し、炭素(コークスピット)を加えて電気分解すると陰極にアルミニウム、陽極には二酸化炭素に分離される。アルミニウムは電気の缶詰といわれ、アルミニウム 1 トンの製造に 15,000 kW の電力を必要とする。かつて日本のアルミ精練は火力発電に頼っていたが、石油ショック以後、序々に後退、現在は水力発電を利用する 30,000 トン規模のものが 1ヶ所残るのみで、殆んどを輸入している。

精練工場の従業員は 2300 人、内 1200 人がニュータウンに居住、ニュータウン人口は家族を含め 5000 人が居住している。工場には元留学生、元研修生を含め約 60 名の人が働いており、日本人は病院の看護婦を 1 人を含めた 4 人が業務している。

地域社会との融合が現在の課題となっているが、病院等は地域社会に開放されている。

1984 年から 30 年を経過した時点でインドネシア政府に移管される事になっている。

精練工場ではアルミインゴット 1 本 2.25 kg のもの(価格 US\$ 40 位)を 1 月 550 本生産、その大半は日本向けに輸出している。輸出専用バースの内、1 バースをインドネシア政府に移管。4110 億の投資額の原価償却後には大きな競争力を期待出来る。

タンジュンガデンのニュータウンは、アサハンプロジェクト従業員の住宅地であり、1350 個の住宅、寮 5 棟(内 1 棟女子寮)の他、病院、タウンセンター、ゴルフコース(防疫施設を兼ねる)等をもつ。病院には 12 年在職する日本人看護婦森氏と会見。この施設は多く JICA の援助を受けて完成したとの事であった。

(13-2) パリトハン、INALUM 発電所

トバ湖を水源とするアサハン河上流に、三つのダムと二つの発電所(シグラグラ、タ

ンガ)が作られた大プロジェクトである。トバ湖は高水敷が海拔905.5mであり、2.6mの範囲で水位の調整を行っている。最大発電量は513MW(黒田ダム300MW)平均426MWで発電を行っている。従業員300人(内日本人9名、内1名看護婦)が技術、保守点検にあたる。

シグラグラダムの水量は毎秒90トンあり、発電所には毎分333回転の発電機4機を備えている。

アサハン河の水質汚濁が問題視されているが、アサハン河最上流に、トバ湖周辺の松を原料とする、製紙工場インドネシアレーヨンが建設され、未処理の工場廃水が流されているためであり、飲料水の取水も他の水源に頼らざるを得ないとの事であった。

トバ湖の水位低下は様々な原因、周期説、湖底の地質変化、降雨量の変化等々であるが湖周辺の木材伐採等に依る環境の変化によってひきおこされる土地の保水力低下と蒸発率の上昇等も大きく関連しているのではないかとの事である。資源開発と自然環境問題はどんなに論じても論じ尽せるものではないのだという事を改めて知らされた。

(13-3) 訪日経験者(留学生、研修生)との懇談昼食会(スメルタ・サイト)

訪日経験者50余名の内17名との懇談であった。事務職、現場に於いて指導的立場に立つ人々であり、将来を担う人々である。当初250名いた日本人従業員が現在3名になっているという実際の数字が示している様に、技術移転が順調に進んだ例として誇れに思っており、プロジェクトの一層の充実を計る為の日本の支援を要望するとの事である。アルミ精練技術は過去の経験データを積みあげた上での技術革新が最も一般的なものであるため、アルミ精練自体が無くなってしまった日本から、より高度な技術を期待する事は難かしい事も現実問題の様である。出席者の何人かは大変に刺激になった、この様な会を夜を徹して行えればもっと有意義であったとの感想を得た。INALUMに対する地域社会の要望に対しては公益的役割を担っており、共存する事が望ましいとの事である。

2-2 帰国青年同窓会等の活動状況

2-2(1) KAPPIJA-21 との懇談及び昼食会

青年招へい計画帰国青年同窓会(KAPPIJA-21)は1985年に結成され、全員がKAPPIJA-21のメンバーとして登録する事を原則としているが、1989年迄に、ジャカルタの中央組織、西部ジャワ、中部ジャワ、スリアン等の地方で組織化されているにすぎない。1990年1月にはジャカルタに於いて、全国的な大会を催し、その席上、未組織の地域の問題をとりあげ、全国的なKAPPIJA-21の組織化を計って行きたいとの事であった。1988年には第1回アセアン地域同窓会をジャカルタで開催、今後の地域協力等方針を討議する機会を得、日・伊两国間のみならず、アセアン域内の多国間の友好、交通の道を開く礎となった。又1989年には、日伊セミナーを開催

1 2日間の期間中、大学の先生を講師に招き、日伊两国関係、環太平洋諸国との関係について話し合いをもつ他、日本文化の紹介等を行った。又ジャカルタ市所在の日本企業を招いてのテニス大会等も開催し協力関係を促進しているという。

青年スポーツ省等を訪れる各種の日本青年訪伊団のアテンド等を行っているが、これとは別に日本政府が、公式に日本青年の派遣を検討してほしいとの要望があった。地方組織の充実によって、中央だけではなく地方での受け入れも可能となるだろうとの見解であった。

日本側からの、日伊の子供達の作文や絵の交換交流提案について、KAPPIJA-21側は、「個人と個人の交流も大切であり、地方との交流も推進してゆきたいと思っている。KAPPIJAとして窓口役を果たせるだろう。窓口さえ明確であれば、より確実な交流が出来るのではないか」との見解を示した。

特に青年招へい事業についての要望事次として、KAPPIJA-21側から要望された諸点を列記する。

1. 招へい期間の延長。(一ヶ月では日本を皮相的にしか見る機会がなく、より専門的でニーズに合った理解が出来ない)
2. 地方プログラム中のホームステイ期間の延長。(日本の生活文化を理解するには最も重要なものである。)
3. 選ばれてインドネシアの代表として派遣されるのもっと学ぶ機会があっても良い。
4. 全体的に強行軍で、観光なども多く、日本の社会、抱える問題などが見えない。
5. 日本の発展の根本的要因を学びたい。
6. 日本理解をより深め、社会化してゆくための追体験、再度の訪日の機会を与えてほしい。等である。

上記要望事項に対しては我々調査団の答えるべき問題ではなく、JICAあるいは外務省等の関係機関に伝えておく旨、回答した。

2-2(2) 西ジャワ州KAPPIJA-21

西ジャワ州同窓会のメンバーは56名を要するが、具体的な活動は現在迄行っていないとの事である。相互交流の立場から、バンドン地域に来訪する人達のホームステイ等を受け入れて来たとの事である。

Aas氏の好意で用意された昼食懇談会中、Wawan氏より次の様な要望があった。

1. 前橋市の青少年ホームとGGM(青少年会館)との協力提携を結びたい。
2. 西ジャワ州同窓会の活動の一環として、日本のパートナー(青年招へい事業に係わった日本人と)と経済活動を行いたい。(例えば、コンピュータ学校、日本語学校の経営等)

2-2(3) 北スマトラ州メダン市同窓会

現実には同窓会組織は結成されておらず、帰国以来始めて顔を合わせたとの事である。地方には中央の情報も伝わらず、お互いに忙しい事もある、何か外側からのインパクトがないと、日本に行った経験を生かす事は、なかなか難しい事で、今回アフターケア調査団がメダン迄足を伸ばしてくれた事は喜ばしい事である。ジャカルタやバリ等には日本の方々が多く来ると聞くたびに、自分達はとり残されている様な気がしている。自分達にもホームステイ等受け入れる余地はあるし、何よりも様々な情報がほしい。今回の事を機会に、メダンにある訪日経験者の他の会等と協力し、訪日経験を生かしてゆきたいと、その抱負を語っていた。具体的な活動に至る迄には、様々な困難があるだろうが、地方に於ける影響は考えられない程大きいので、日本理解を深める為の、知日家を育成していく為の配慮が必要であろうと思う。他の地方でも同じ事だろうが、少なくとも、自分達が取り残されていると思う様な状態を極力少なくしていく方法はある様に思える。

KAPPIJA-21 との交流は時間的には短かったが、昼食会、夕食会等を通してより深いものになった。

2-2(4) 国家青年委員会(KNPI)との懇談

国家青年委員会(KNPI)と中青連の係わりは、Asia Youth Council 結成以来のインドネシア側のパートナーであり、青年招へい事業に於いても、中央、地方を問わず多くの代表を参加させている。今回懇談した全てが、訪日経験者であり、本音の部分も多少うかがえた。

KNPIは31青年団体で組織される国家レベルの結合体で5850万人の会員を有し、組織、青年育成、教育、移民と技術、生活環境、婦人、国際協力等10部局に分かれ活動している。執行部人事は31団体から推薦された者で構成され、国の行政単位に従い組織化されている。政府組織ではなく、各自仕事を持ちながら、奉仕的活動を行っている。

基本的な活動は、パンチャンラ、1945年憲法に基づき、年毎に制定される国の大綱をもって実践される。国、郡、地域レベルでの学習が常に行われており、不活発な執行部は解任される事もある。KNPIの活動資金は、会員の会費、企業の寄付金、政府援助から成り立っている。

生活環境部では自然保護、緑化運動、キャンプ活動などを通し、社会の啓蒙を行い、婦人部は女性の自立、女性の国家建設への参加推進、国際協力部は、インドネシア理解を深める為の外国へのアプローチ活動などを行っている。

質疑応答を通して、会員数は16才~40才迄の全てが自動的に会員として登録される事、中央の執行部は87名、内7名が国会議員である事、職業も千差万別で、今回の出席者は、大学教授、助手、教員、医者、自営業、商務省、労働省の役人である事が明

確になった。

その他課題としては、教育制度が確立されて間もなく、人材の育成が急務である事、若年労働者の技術熟練度の不足、植民地時代から培われてきた公務員志向意識を他の職業にふりむけ、民間企業、自営業の発展を計る事、現在、1190万人にのぼる青年が失業中であり仕事の場を広げる事が急務である事等であつて、これらは全て国の問題であり、青年自身の問題でもあるが、即座に解決出来るものではなく苦慮しているとの事である。

又、日本に対しては、日本人のボランティア意識はインドネシア人より低く、経済的な尺度で考えがちだが、日本の車や日本商品があふれているのを目にして誇りに思われるかどうか、日本は経済優先で、周辺の国々に目を向けていないのではないかと、もっと周辺の国々に関心をよせ、理解を深めてほしい、特に青年のアジアへの関心を喚起する事が必要で、そうしなければ孤立してしまうのではないかとこの危惧の念を吐露していた。

調査団全員改めてインドネシア青年の国家建設にける思いに胸を打たれると同時にアジアとの係わりを真剣に考える事の大切さに身のひきしまる思いがした。

2-3 セミナー、交流会実施状況

ジャカルタKAPPIJA-21との昼食交流会、西ジャワ州KAPPIJA-21、ホームステイ受入れメンバーとの昼食懇談会

日程上の都合で華々しい交流パーティとはいかなかったが、青年招へい事業を通じて知り合った仲間同志の気のおけない心の通った交流会となった。自由な雰囲気の中で話し合いをもつ事は、日・イ青年のみならず、同窓生同志の旧交の暖めあいともなり有意義なものである。

北スマトラ同窓生との交流パーティ

出席者 北スマトラ在住同窓生、小倉在メダン副領事夫妻、

ロスバダ新聞社社主、アニ・イドリス女史、イズハリ・アグスジャヤ記者

急な交流パーティであつたが、メダン在住の同窓生のみならず、3時間も車にゆられて駆け参じてくれた友の心根に打たれるものがあつた。私達調査団との交流会は、同窓生同志の帰国後初めての顔合せともなり、互いに思いを新たにした様である。在メダン副領事との出会いによって、新たな活動の基盤となり得る情報と人脈を得る貴重な機会ともなり、北スマトラ社会に於いて指導的な社会啓蒙者である方々との出会いを通じてお互いに刺激を与えられる存在ともなり得たと思う。地方にいて情報を求め続けている同窓生にとって、私達がその刺激剤になり得れば望外の喜びであり、忙しい中一日中同行し、野外マーケットで、ドリアンを食べ合った、心やさしきメダンKAPPIJAのメンバーに幸あれと心から祈りたい。

2-4 ホームステイ実施状況

今回のホームステイの労をとって下さったのは、西ジャワ州KAPILIJA-21であり、暖かい対応に感謝したい。プログラムの都合上、ホームステイ家族とゆっくりと交流する時間をもてなかつたのは残念であったが、心のこもった配慮に、インドネシアの方々の親切さを実感した。

ホームステイ名簿

1. 西 広 咲 子 MR. DRS. AAS SYAIFUDDIN MA
 JL. CIPEDES TENGAH 上/36 Bdg.
 Tel : 85716, 81841
2. 佐 藤 早 苗 MS. WINNY
 JL. MOH. RAMDAH No 70, Bdg.
 Tel : 56720
3. 石 川 優 子 MR. DRS. WAWAN DEWANTA
 JL. KEMBAR TIMUR 上/22 Bdg.
4. 長谷川 章 悦 MR. ASRUL
 JL. KARAPITAN No 63 Bdg.
 Tel : 461301, 56894
5. 吉 野 喜 信 MR. WING. WARDAWA
 JL. TRIPANG No 9
 Tel : 460805
6. 坂 本 進 MR. BNDI FAISAL
 JL. PERKEBUNAN No 6 GEGER KALONG HILIR
 Tel : 212639

3. 総 括

青年招へい事業アフターケア調査団の派遣は、相互交流を通じて、より深い国際理解を推進してゆくには時宜を得たものであり、培かわれた友情、友好を恒常的なものにしてゆくには有意義なものである事を確信するが、翻ってみると、将来共に改善してゆくべき点など多々ある様に見うけられる。旅を通して気づいた点を幾つか記してみたい。

(1) アフターケア調査団の目的、意義の明確化、資料の配布

相手国の訪問先、表敬先に対し、文書化した説明書を事前に配布し、その目的や意義を明確にする事により、適切な話し合いが持てる様になると思われる。(特に同窓会に対して)

又派遣団員に対しても、招へい事業の経過等理解出来る様な資料或いは事前研修会等の配慮を願いたい。

(2) 相互交流継続の為の日本側の受け皿、或いは推進母体の形成

アセアン各国に於いて、青年招へい事業の同窓会組織の充実化が企られていると聞くが、相互交流を推進してゆく為には日本側で積極的な役割を果たしてゆく受け皿、窓口が必要な時期に来ていると思われる。この受け皿を通し、適切な情報の提供、派遣の為の便宜供与を企れる様な態勢を整えてゆかなければ、散発的な交流に流れてしまい、事業に係わった日本側関係者の要望等を汲み上げる事はむずかしく、恒久的な交流を続けて行く隘路ともなりかねない。

(3) 同窓会の問題

同窓会の結成については各国様々な問題をかかえて居られると思われるが、インドネシアに於いては、組織の充実と、機能性を高めてゆく必要を痛感した。首都を中心とした活動のみならず地方への情報提供等積極的に考える必要があると思われる。少なくとも自分達は取り残されているという様な思いにとらわれる事のない様、地域間ネットワーク、世代間ネットワークの充実を企れる様な指導が必要不可欠であり、活動経費の援助も平等に、又、同窓会の自助努力によって、自身が活動出来る様な態勢作りを方向づける配慮が必要であろう。日本理解を深めるためには、絶え間ない刺激を送る事も地方の会員には必要である。

団員の希望と地方の活動状態を確認したいという要望をもとに、強行軍とも思われる日程であったが、チーム1人1人の積極的な協力と、チームワークの良さで無事乗り切る事が出来た。同窓生との交流を通じての友情の深まりとは別に、この旅を通して、インドネシア社会の様々な側面を観る事で、各々が少しでも確認の機会を増し、理解を深めた事を確信してやまない。「いつの日か又インドネシアへ」を合言葉に、アフターケアチームの同窓会を結成、例え小さな力でも今後、相互交流の推進を計るために学び協力し合っとうこうと話した。

アフターケア派遣もやっと端緒をついたばかりであり、その重要性は増してゆくだろう事を思う時、形式的ではなく、真に理解の可能なプログラム作りを望んでやまない。

最後にアフターケア調査団派遣の労をとって下さった方々全てに感謝の意を表し、報告とさせていただきます。

マ レ イ シ ア

平成元年12月 5 日～14日

(社) 青少年育成国民会議

1. 調査チーム派遣概要

1-1 調査チームの構成

- ① 坂 梨 政 雄(39. 男) 社団法人九州・山口経済連合会
×九経連と九州8県で実施している、「アセアン混成国家公務員グループ」の九州受入れにあたり、昭和63年度から地方実施協力団体の実務担当者として活動している。
- ② 大 熊 康 之(35. 男) 静岡県沼津市役所市長室国際文化室
×昭和62年度から、アルゼンチン及び太平洋諸国青年招へい事業の沼津市受入れにあたり、市民を巻き込んだ組織づくりをするなど、地方実施協力団体の実務担当者として活動している。
- ③ 赤 間 八 郎(42. 男) 福島県生活福祉部青少年婦人課
×福島県では、昭和59年度第一回「アセアン混成国家公務員グループ」の受入れに協力し、昭和63年度から地方実施協力団体の実務担当者として活動している。
- ④ 青 木 章 夫(40. 男) 沼津ふれあい市民委員会(矢崎電線株式会社)
×昭和62年度から、アセアン及び太平洋諸国青年招へい事業の沼津市受入れにあたり、ホームステイ受入れ家庭として協力し、沼津ふれあい市民委員会の委員として活動している。
- ⑤ 阿 部 正 宏(21. 男) 共通プログラム体験交流担当(東京外国語大学)
×共通プログラム「体験的日本語学習」でアセアン等来日青年をお世話する日本青年のまとめ役として、また、自ら外国青年を引率し日本語を指導するなど、献身的な活動をしている。
- ⑥ 湊 明 弘(45. 男) 社団法人青少年育成国民会議
×昭和59年度「21世紀のための友情計画」に係るアセアン等青年招へい事業開始から、中央実施協力団体の実務担当者として、企画運営に携わり活動している。

1-2 調査日程

- ① 調査日時：平成元年12月5日(火)から12月14日(木) 9泊10日

- ② 日程の詳細

12/5(火)

14:00 ○出発前研修会

・オリエンテーションの後、上村国民会議事務局長から、「今回のアフターケア調査の趣旨及びアセアン各国での同窓会活動の現状等について説明を受け、特にマレーシアの同窓会組織“PAMAJA”は活発な活動を行っているので、十分に充実した交流を深めてほしい…」旨の挨拶をいただいた。

- 15:00 ○国立青少年センター出発(バス)
- 19:00 ○成田国際空港到着
- 21:45 ○成田国際空港出発(MH95)
- 12/6(水)
- 03:45 ○スパン国際空港到着
- ・“PAMAJA”のJamil会長、Ibrahim副会長、Zakariah事務局長及びマレーシア滞在中お世話いただくこととなる、コーディネーターの一人Umura女史(89年勤労青年グループ参加青年)等関係者の出迎えを受けた。
- 04:50 ○ホテル到着、休息(Holiday Inn On the Park)
- 09:45 ○JICAマレーシア事務所表敬訪問
- ・岡部和夫事務所長より、マレーシアの一般的な概要と協力活動の実態について説明を受けた。
 - ・同事務所において、駒沢彰夫次長と“PAMAJA”のZakariah事務局長、コーディネーターのUmura女史を交えて、マレーシア滞在中の日程調査と確認を行った。
- 11:00 ○在マレーシア本邦大使館表敬訪問
- ・伊藤光子二等書記官のお世話で、小池寛治公使を表敬し懇談を行った。
- 12:00 ○マレーシアの民族レストランで、初めてのマレーシア料理を堪能した。
- 14:00
- ・「21世紀のための友情計画」マレーシア側担当窓口責任者であるAzizan東方政策課次長及びWahab同副部長より、滞在プログラムに係る訪問地や留意事項の説明及び“PAMAJA”と人事院との協力関係等について説明を受け、記念品の交換を行った。
- 16:00 ○ホテルに戻って仮眠をとる。
- 20:00 ○“PAMAJA”主催「歓迎夕食会」
- ・Zakariah事務局長の自宅に招待され、“PAMAJA”のメンバー15名が参加し、手作りの心のこもった歓迎を受けた。
- 12/7(木)
- 06:00 ○ホテル出発
- 07:00 ○クアラ・ Lumpur空港出発(MH176)
- ・人事院のWahab副部長、“PAMAJA”のIbrahim副会長を初め、Zakariah事務局長、Hassan氏(会計担当)及びコーディネータ

一の Umura 女史（89 年勤労青年グループ参加青年）の 6 名が、
我々のためにアロースター市での全日程に同行してくれた。

- 12/8 (日)
- 04:45 ○アロースター市（ケダ州）到着
 - ・“PAMAJA”アロースター支部のメンバー 10 名が歓迎の横断幕を掲げて、我々一行を熱烈に出迎えてくれた。
 - 08:00 ○空港内レストハウスにて「歓迎朝食会」
 - 09:00 ○市立歴史民族博物館を見学
 - 10:00 ○ケダ州庁舎表敬訪問
 - ・Taudin 州知事秘書より、ケダ州の概要説明と映画観賞の後、若干の質疑応答を行った。
 - ・Hanafi 州議会議長を表敬訪問の後、議事の行われている州議会を傍聴
 - 12:30 ○ケダ州知事及び州議会主催「歓迎昼食会」
 - ・マレイシア風昼食をとりながら、若手議員と熱心な懇談が行われた。
 - 13:00 ○Paduka ケダ州知事に接見
 - ・州知事より熱烈な歓迎の挨拶と記念品の交換が行われた。
 - 14:00 ○市内のホテル・グランドコンチネンタルで、休息して仮眠を取った。
 - 16:30 ○地元青年主催「歓迎会」
 - ・アロースター市内の青年代表、“PAMAJA”支部のメンバー及びホームステイ家族、約 60 名が参加し、マレイシア民族芸能を興味深く観賞した。（当市で協力活動している、二人の青年海外協力隊の女性隊員も招待されていた）
 - 18:00 ○ホームステイ・プログラム（～12/9）
 - ・“PAMAJA”支部のメンバーのホームステイ家庭にそれぞれ引き取られ、ホームステイ・プログラムに入った。
 - ※（ホームステイ・プログラムの詳細は、別項で報告する。）
- 12/8 (日)
- ホームステイ・プログラム
 - ・イスラムの休日でもあることから、終日ゆっくりとそれぞれの家庭のプログラムで、楽しく有意義な一日を過ごした。
- 12/9 (日)
- 09:00 ○ホームステイ・プログラム（ランカウイ島訪問）
 - ・ホストファミリーと共に、Kuala Keda 観光港に、“PAMAJA”のメンバー 6 名を含め、合計 26 名が集合した。